
私たちの学園生活日常

i z u m i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私たちの学園生活日常

【Nコード】

N2756W

【作者名】

izumi

【あらすじ】

私たちは高2になった春、別の学園へと転校したんだけどその学園がある世界は私たちが知っているアニメやゲームのキャラクターたちが生活している世界でした…。初めての学園作品です。温かい目で見守っていただけたら幸いです。使用作品欄 東方project 涼宮ハルヒの憂鬱 ハヤテのごとく！ らき すた 銀魂 バカとテストと召喚獣 とらドラ！ 緋弾のアリア 電波女と青春男 生徒会の一存 けいおん！ 魔法少女リリカルなのは 大乱闘スマッシュブラザーズ とある魔術の禁書目録 ポケモン ぷよぷ

よ

プロローグ（前書き）

僕の初めての学園作品です。更新はかなり遅いと思いますがよろしくお願ひします。

ブログ

― 4月10日 ―

高2になった今年の春、理事長から別の学校に転校するように命じられました。

今は、寮で生活するという事なので自分の部屋の荷物を整理しています。

明日、指定された場所に集まるように言われているんです。

あ、自己紹介が遅れましたね。私、かわむら あゆ河村亜由と言います。

私の他にも何人が転校を命じられた人がいるんですが…何ででしょうね。

悪いことはひとつもしてないのに…。

でも、新しい生活に向けて頑張らなくっちゃね。

ちなみに家族には転校のことは既に言いました。

家族は一人で大丈夫なの？、と心配しましたが私は一人でも大丈夫だよ、って。

—翌日—

私は指定された場所に向かいました。そこには私以外の人がもう集まっていました。

？「遅いよ…。待ちくたびれたよ…。」

そうやってきたのはツインテールをした私の親友の影久愛ちゃんです。
性格は…明るくていい子ですけどおかしい部分もあります。

髪の色は黒っぽい赤でめは普通より濃いピンクです。

？「よし…これで全員だな。」

そう言ったのは赤い髪をした信童穂月君です。

今はまじめですが本当は面倒くさがりです。目の色も赤色です。

？「お迎えこないね…。」

今言ったのは前髪をヘアピンでとめている子、西兎智ちゃんです。
目は左目が青色で右目が赤色です。アニメとかで言うオッドアイってやつですね。

？「ほんと…もう20分も待っているのに…。」

今のは智ちゃんの双子のお姉ちゃん、西兎麻衣ちゃんです。

お姉ちゃんも妹と同じオッドアイなのですが左目が赤色で右目が青色なんです。

何で妹ちゃんと反対なんだろうかね？髪は2人ともピンク色なのに…。

？「鞭むちに拘束鎖こうそくさに秘密ノート…全部あるわね…。」

今おつかないことを言ったのは羅井野美宇らいのみうちゃんです。
髪はロングヘアーで黒色、目は紅色です。
性格は…Sです。ドSです。

と、私たちの前に…。

？「よく集まってくれましたね。」

女性が現れました。見た目は30〜40くらいでしょうか？
なんだか不思議な服装をしています…。

西鬼姉妹がこの人を見て驚いてました。何ででしょうか？

信童君は首をかしげていましたが、心当たりがあるんでしょうか？

信童「早くしてくれよ…。こっちは眠たいんだ…。(気のせいだよ
な…。)」

？「わかりました。では今から行きますので…目をつむってください。
い。」

智「(あれってやつぱり…そうじゃない?)」

麻衣「(そうだよね…でも目をつむれって…。)」

羅井野「何で目をつむる必要が…。」

？「はあ!~!」

6人「!？」

突如、周りが暗くなりました。そして、周りが明るくなると…。

信童「どこだここは…。」

そこはどこかの学校の門の前でした。そして女性がこう言いました。

？「私たちの『無敵光星学園』へようこそ!!！」

これが、ハチャメチャな毎日が始まる瞬間でした…。

プロローグ（後書き）

最初からグダグダですね…。

温かい目で見守ってください。

よろしくお願いします。

それと、アニメやゲームのキャラで性格、喋り方などが間違っていたらメッセージをください。

メールを確認したら訂正いたしますんで。

キャラ紹介（前書き）

最初に出て来たキャラの紹介です。

キャラ紹介

キャラ紹介

かわむらあゆ

河村亜由

年齢：16歳

誕生日：7月21日

性別：女

髪：ショートヘアで茶髪

目：黒色

性格：穏やかで優しい

この小説の主人公。丁寧な口調で喋る。甘いものが好き。辛いものが嫌い。

勉強はできる方だが運動はダメな方。ただ、母からの遺伝で手の握力が半端なく強い。

かげひさあい

影久愛

年齢：16歳

誕生日：5月9日

性別：女

髪：ツインテールで黒っぽい赤色

目：濃いピンク色

性格：明るく陽気

亜由の親友。現代の忍者みたいな身体能力を持つ。頭は悪い。百合、ドM気質。好きなことはコスプレさせること。

信童穂月しんどうほつき

年齢：17歳

誕生日：4月2日

性別：男

髪：肩までの長さで大きいアホ毛がある 赤色

目：赤色

性格：面倒くさがり

愛の友達。面倒くさがりだが足は某番組の黒い服の人よりも速いといわれている。勉強はダメ。好きなことは寝ること。実は甘党。

西兔麻衣にしうまい

年齢：16歳

誕生日：12月24日

性別：女

髪：腰辺りまで届くポニーテールでピンク色

目：左目が赤色で右目が青色のオッドアイ

性格：天真爛漫で素直

愛の友達。双子姉妹の姉。嘘がつけない。料理は妹と違い、全くできない。趣味は運動すること。身体能力はいい。頭は普通。

西兎智にしうとも

年齢：16歳

誕生日：12月24日

性別：女

髪：肩までの長さで前髪はヘアピンで留めている　ピンク色

目：左目が青色で右目が赤色のオッドアイ

性格：天真爛漫で天然

双子姉妹の妹。ちょっとドジっ娘。趣味は植物を育てることと料理すること。運動は普通。頭は普通。怒るとかなり怖い。料理の腕はかなり高い。

羅井野美宇^{らいの みづ}

年齢：16歳

誕生日：2月17日

性別：女

髪：腰まで届くロングヘアで左右に白い大きなリボンを二つ付けている　黒色

目：紅色

性格：おとしやかで超がつくほどのサド

愛の友達。おとしやかに見えるがかなりの腹黒&ドS。運動もでき、勉強もできる。趣味は人の恥ずかしい秘密を探ること。実は羅井野が真っ向否定する秘密がある。

キャラ紹介（後書き）

西兎姉妹の目の設定はあるキャラ達を元に行っています。
こつゆう設定のキャラ出してみたかったです。
で、羅井野はあるアニメのキャラを元に行っています。

この学園長&寮長さん（前書き）

あとの方で2人のオリキャラが出ます。

1人は名前はまだわかりませんが…。

この学園長&寮長さん

よう、信童だ。今俺たちは学園長室と言う所にいる。

俺たちの前には先ほど出会った女性がいた。

？「はじめまして」私はこの学園の学園長を務めています、八雲紫です。」

やっぱりだ。朝会ったときから思っていたのだがやっぱり東方projectの八雲紫だ。

何でいるのか気になるところだ。

紫「君たちにはこの学園で生活を送ってもらいます。」

いや、何でだ。俺は別に何も悪いことはしていない。普通に学校生活を送ってきた。

紫「君たちは全員3クラスです。」

俺たち全員同じクラスか。さっきのことか？もうなんか吹っ切れた！

紫「では話はここまでです。」

なんか初日からいろいろ疲れた…。

紫「そうそう、寮にも行ってみた方がいいんじゃないかしら？明日からクラスで勉強してもらうからね。今日は自分の部屋でゆっくり

と休みなさい。あと授業は午前中だけなので。」

で、俺たちは寮に向かっているのだが…。

なんだここは。広すぎるだろ。逃○中なんか楽々できる広さだぞこれ…。

智「疲れた〜…。」

麻衣「一体どこにあるのよ…。」

信童「とりあえずここの学園の人に聞いてみるか？そうした方が早い。」

影久「じゃああの人に聞いてみようよ…すいませ〜ん。」

影久が声をかけた人はこの人のようだ。だが俺は見たことある。

？「はい、何でしょうか？」

影久「寮の場所どこですか？」

？「あ、それなら私が連れて行ってあげますよ。」

影久「ありがとう！みんな〜！」

？「こちらです。」

―移動中―

？「そう言えばあなたたちはここでは見かけない顔ですね。どなたたちなんですか？」

影久「私たちは転校生です！」

？「あ、あの噂の…。確か3クラスですよね？」

影久「そうだよ。」

羅井野「此処のクラスは何クラスあるんですか？」

？「えつと…全学年9クラスですね。」

影久「へえゝそんなにあるんだ。」

河村「あ、私河村亜由って言います。」

？「あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね。」

影久「私は影久愛だよ！」

信童「俺は信童穂月だ。」

麻衣「西兎麻衣です。」

智「西兎智です！」

？「あれ、しまいですか？」

智「私たちはね、双子なんだよ。」

？「へえ、そうなんですか。」

羅井野「羅井野美宇って言います。よろしく。」

？「私の名前は古泉一樹です。以後お見知り置きを。」

――10分後――

亜由です…結構な距離を歩いています…。

古泉「此処が寮です。」

どれだけ歩いたのでしょうか…。かなりの時間がたちました。

信童「これ寮か？大きさを言ったらデパートじゃねえのか？」

古泉「いえ、寮です。」

智「大きい…。」

麻衣「よつぱとたくさん生徒がいるのね…。」

古泉「ここは男性寮です。女性寮はこの裏にあります。二つの寮は行ききはできるんですが、いろいろ問題がありましてA M 1 0 : 0 0 からP M 1 : 0 0 までの間となっています。」

信童「それにしても寮の周りは自然豊かだな…。」

古泉「確か滝もあると言っていましたよ?」

ここは本当に学園なんでしょうか? 滝がある学園なんて聞いたことがありません。

古泉「寮長に挨拶しておきますか。」

信童「寮長? そんな奴がいるのか?」

古泉「はい、二つの寮長をまとめる人です。」

—寮長室前—

古泉「寮長さん。新しく此处で生活することになる人たちだそうですよ。」

部屋の中には2人の男女がいました。

?「お? お前たちがそうか。学園長から聞いていたが待っていたぞ。」

」

影久「あ、私影久愛です。」

河村「河村亜由です。」

信童「信童穂月…。」

麻衣「西兎麻衣です。」

智「西兎智です！」

羅井野「羅井野美宇です。」

？「私はこの寮長三千院ナギだ！よろしくな！」

？「僕はお嬢様の執事をやっています。綾崎ハヤテです。」

6人「よろしくお願いします。」

ナギ「部屋だがここに場所が書いてあるからな。」

—自分の部屋の中—

智「あー疲れた…。」

ふう…やっと休めるわね…。私たちは2人で一つの部屋なのね。ま

あ実際は3人なんだけど…。

麻衣「智。まずは荷物整理…。」

智「ZZZ…。」

寝ちゃってる…。まあ仕方ないわよね…。

？「あの…それなら私が手伝いましょうか…？」

麻衣「よろしく頼むわ。」

さうて…明日から騒がしくなるわね…。

信童「…。」

なんだここは…何で俺が知っているアニメとかのキャラがいるんだ…？

パラレルワールドの一種ってことか？

ああ…なんか頭がむしゃくしゃする…。

まあ…考えても何も出てきそうにないな…。

それにしても…あいつらがいないだけでこんなに寂しいとはな…。

秋神さん…元気にしてるかな…狂撃のみんなは…どうしてるかな…。

1111の学園長&寮長さん（後書き）

最後出て来た2人の人物…もうちょっとあとの方で明らかにします。

クラスのみんな（前書き）

いろんなアニメが登場します。

クラスのみんな

―翌日―

河村「ふあゝゝよく寝たゝ。」

今日からこの学園で勉強するんですね。一体どんな生徒さんや先生たちがいるんでしょうか。

？「はあゝゝかったりゝなあゝゝ。」

と、外から声が聞こえてきました。ちょっと窓を開けてみるとゝ。

？「何でおれたちがこんな朝っぱらから草むしりしなきゃいけないんだゝ？」

？「しょうがないでしょ。そうでもしなきゃお金もらえないんですからゝ。」

？「うおおー！！働いてたくさん卵かけごはん腹いっぱい食うネ！」

銀髪の人とメガネかけた人とオレンジ色の髪の子が作業着みたいなを着て草むしりしていました。

？「神楽ちゃん？草むしりに来たんだよ？穴掘って遊んでる場合じゃないよ？」

神楽「何言ってるアルか！植物の根は地下深くまで伸びているアル！それを絶やさない限りまた生えてくるアル！！」

？「お金がパーになっちゃいますよ！銀さん、なんとか言って下さいよ！」

銀さん「おお～い神楽～。早くやめないとテメエをのばしてその穴に埋めてやるぞ。」

神楽「うつさいアル！天パーは黙るアル！」

銀さん「何だとテメエ！俺が一番気にしてるところを！！」

？「はいはい2人とも…仕事しますよ…喧嘩しないで下さいよ…。」

銀さん&神楽「メガネは黙れ」（黙るアル）。」

？「んだとテメエらーーーー！！！！！！！！」

河村「…早く行こう。」

とりあえず、見なかったことにしました。

――2年3組前――

6人全員集まりました。なんだか緊張します。

先生「今回なこのクラスに転校生が来たで。」

生徒「先生！転校生は何人ですか？」

先生「6人やで。」

生徒「先生！その中に可愛い子はいますか！？」

先生「吉井くお前もうちよつと他のことは考えられへんのか？」

生徒「先生！その中に話が合う子っていますか！？」

先生「泉くげんこつくらわしたるか。」

泉「そ、それだけは勘弁。」

先生「じゃあ転校生入ってきて自己紹介してもらおうか。入ってきてや。」

ガラッ

ざわざわ…女子5人だ…みんな可愛い…男子一人いる…。

先生「じゃあ自己紹介な。」

影久「影久愛です！よろしく！」

信童「信童…穂月…」

麻衣「西兎麻衣です。よろしくお願いします。」

智「西兎智です。よろしくお願いします。」

羅井野「羅井野美宇です。よろしくお願いします。」

河村「あ、あの…河村亜由です。よろしくお願いします！」

ざわざわ…あの子河村さんって言うんだ…あの人たち双子かな？

先生「じゃあ席はな…影久は吉井の右で信童君は桂の左な。んで…麻衣ちゃんやったかな？」

麻衣「あ、はい。」

先生「麻衣ちゃんは坂本の前な。んで智ちゃんは遠山の右な。羅井野は平沢の左な。河村は高須の右やな。」

河村「あ、はい。」

先生「んじゃ席着いてな。」

影久「君確か吉井君だったかな？」

吉井「そくだよ、僕は吉井明久、これからよろしくね！」

影久「よろしく。」

信童「此处か…。」

？「あなた信童君って言うの？」

信童「ああ…信童穂月…。」

？「私は桂ヒナギクって言うの。よろしく。」

信童「よろしく…。」

河村「あ、あの…私…河村亜由って言います…よろしくです…。」

？「俺は高須竜児だ。よろしくな。」

先生「じゃあホームルームはここまでな。」

キンコンカンコン…。

羅井野「えっと…名前は何ですか？」

？「私は柊つかさって言うんだよ。」

羅井野「そうですか…これからよろしくお願いします。」

つかさ「よろしく。」

河村「（女の子が男子の服を着てる…。）」

？「なんじゃ？ジロジロ見て。わしの顔に何かついてるのか？」

河村「あ、いや、そうじゃなくて…名前を聞きたいな…って…。」

？「なんじゃそうなのか。わしの名前は木下秀吉じゃ。」

河村「あ、よろしく…。（じゃ、って言ってる…。）」

秀吉「言っておくが俺でも男じゃぞ？」

河村「え、そうなの！？」

秀吉「…そんなに見間違うかの…。」

？「キンジ！あんなことやこんなことしたらその頭に風穴開けるわよ！」

キンジ「しねーよ！そんなこと！」

智「あの…名前聞いていい？」

キンジ「あ、俺は遠山キンジだ。んでこっちが神埼だ。」

神埼「神埼・H・アリアよ。」

智「そうなんだ！よろしく。」（まあ向こうにいた頃にアニメで見て知っているんだけどね。）

彼らの騒がしい毎日が始まる…。

クラスのみんな（後書き）

えゝ…アニメはまだまだ出ると思います。

クラス名簿（前書き）

2年3組のクラス名簿です。

クラス名簿

―2年3組 クラスメイト名簿―

全29名

河村亜由 影久愛 信童穂月 西兎麻衣 西兎智 羅井野美宇 吉
井明久 坂本雄二 土屋康太 姫路瑞希 島田美波 木下秀吉 平
沢唯 田井中律 琴吹紬 真鍋和 泉こなた 柊つかさ 高良みゆ
き 遠山キンジ 神崎・H・アリア 高須竜児 逢坂大河 丹羽真
御船流子 前川 椎名深夏 杉崎鍵 桂ヒナギク

担任 黒井ななこ 世界史担当

ここは彼らがいる学園がある町から離れた街。その街にあるひとつの人気チェーン店、〇〇屋で2人の男性が食事をしていた。一人は赤い髪で髪型は泉こなたに似ている。もう一人は黒い髪で目は瞳孔が開きつている。

？「…何食ってるんですか？」

？「何って…ひ……たスペシャルだが？」

？「白ごはんにマヨネーズかけただけじゃないですか…。」

？「それよりお前の所に俺と似たようなところがあったとはな…。」

？「僕はそれのいっちゃん上ですけどね。」

？「んで、目的は何だ？」

？「久しぶりに友達と会いたくなってきましてね…。道を聞きたいんですよ。」

？「ほう…で、どこに行くんだ？」

？「それはですね…。」

“無敵光星学園” ってところかな。
「

クラス名簿（後書き）

最後の2人…一人はアニメのキャラです。

部活入部！（前書き）

実はオリキャラ考えているだけで50人近くはいます。

名前とかも考えているんですが…。

全員出すには無理がある。

部活入部！

―数日後―

みなさんはじめまして、羅井野美宇です。今日は学園長に呼ばれて此処にいます。

6人「部活？」

紫「うん。君たちにここの部活に入ってもらおうと思うんだ。」

今日の話は部活のようです。

紫「午後になって授業が終わったらいろいろ見ていきなよ。入りたい部活があったら入部届けを出すかね。」

―授業が終わった放課後―

さて…まず最初は此処ですか…。

信童「SOS団…か。ってこれ部活か？」

影久「まあ兎も角入ってみようよ。あの…。」

部屋の中を見てみました。ほかの部員は来てないようになっているのは本を読んでる女子生徒と…あれ？確かこの男子生徒さんは…。

古泉「やあ、また会いましたね。」

あの時の人でした。確か古泉一樹君でしたっけ。

信童「へえ…君ここだったんだ…。」

古泉「そうですよ。」

影久「ねえ、そっちの子は？」

古泉「ああ、彼女の名前は…。」

？「長門…有希…。」

影久「へえ…そうなんだ！よろしく！」

長門「…よろしく…。」

信童「んじゃ他の部活も見ていこうか…。」

古泉「それだったら近くに軽音部があるので見て行ってはどうですか？」

信童「そうか。ありがとう。」

— 軽音部 —

信童「あの…すいません…見学に来たものなんですが…」

？「あら、見に来てくれたの？」

智「あ、唯ちゃん！」

唯「あー！智ちゃん！」

信童「…全員女子だな。」

麻衣「あの…名前だけでも…」

唯「わかった！名前聞きたいんだって！」

？「私は秋山澪です。よろしくお願いします。」

？「田井中律だぜ！ここの部長だ！」

？「琴吹紬です。」

？「中野梓です。」

？「へえ…いろいろ可愛い子がいるのね…」

亜由「ひゃああー！！？？」

唯「さわちゃん。」

？「あらあらごめんなさいね。私はここの顧問の山中さわ子です。」

智「大丈夫？」

亜由「は、はい…大丈夫です…。」

唯「ねえ、軽音部に入らない？」

信童「悪いな、今は見て回っているんだ。あとで考えてみる。」

―アニメーション研究部―

信童「あのすいません…見学に来たものなんですが…。」

？「部長」。見学に来た人がいますよ。」

？「ようこそアニメーション研究部へ。私はこの部長、八坂こうだよ。」

信童「…俺ここが良い…。」

羅井野「信童君は確かあれでしたからね…。」

智「私もここが良い！」

麻衣「そうね。ここならなんだか落ち着くわ。」

河村「私はもうちょっと他がみたいです。」

こつ「そう。よかつたらここに入ってね！」

その後、いろんな部活を見ていきました。葬り甲斐のある子は何人かいましたが…クスクス…

信童「羅井野、あんまり泣かすなよ。」

え？何で聞こえてるの？

信童「顔見たらわかる。」

あ、そう…。

信童「あの人がお前の趣味をしてるとこ見たら多分地獄行きだぞ。」

それはわかっています。

紫「…何か話してるようだけどとりあえず部活は決まったかしら？」

信童「全員同じ部活に入ることになりました…。」

紫「そう。で、どこなの？」

影久「え〜と…アニメーション研究部です。」

紫「へえ〜…そう趣味あるのね君たち…。」

河村「私は無いんですけど…あるのはこの3人で…。」

信童「俺です！」

麻衣・智「私たちです！」

紫「何で他の3人も一緒に入るんですか？」

羅井野「まあ…とりあえず知り合いのいる所にいたいという理由です。」

紫「ふ〜ん…決まったからにはこれ渡さないと。はい、入部届け。」

6人「ありがとうございます。」

紫「それに書いて担任の先生に渡して下さいね。」

6人「はい。」

その夜…。

智「zzz…。」

麻衣「ふふっ…楽しい毎日になりそうね…。」

？「いいですね〜…皆さんは…私も生きてたら皆さんと仲良くできましたのに…。」

麻衣「でもここ人間じゃない人もいるから南夜ちゃんもいけると思
うわよ？」

南夜「そ、そうですか…？それでしたら学園長さんとお話して皆さ
んと勉強したいです…。」

麻衣「明日、聞いてみましょうか！」

南夜「ほんとですか！？やったー！」

—???

？「久しぶりに会いに行ってみようかな…。」

部活入部！（後書き）

今回出て来たオリキャラは後日紹介します。

二人の転入生（前書き）

ついにオリキャラの名前が判明！

二人の転入生

紫「…で、その子をこの学園に入学させたいと？」

麻衣「はい、勝手なお願いですが…。」

紫「…まあいいでしょう。今回だけですよ。」

麻衣「あ、ありがとうございます！」

紫「じゃあその子ともう一人も一緒にクラスに…。」

麻衣「？もう一人いるんですか？」

紫「そうなの。2人はあなたたちのクラスに入ることになるから。」

麻衣「そうですか…あ、ありがとうございますー！」

ボタン！

紫「…しかし、幽霊が他にいたとはね…。まあいるか…。」

—次の日—

ななこ「今日はな、このクラスで勉強してもらった子が二人おんねん。」

「

ざわ...ざわ。

「だから自己紹介してもらおうと思うねん。」

ざわ...ざわ。

「じゃ、入ってきてもらおうか。」

ガラッ

そうやって入ってきたのは藍色のロングヘアの髪的女子と赤い髪をした男子だった。

6人「つてえええええええええええ！！？？？」

「おーテメエらもこの生徒かー。」

「なん？知り合いか？」

信童「ア、ハイ！ソ、ソシナトコロデス…。」

ななこ「何でカタコトや。読者が読みにくいやろ。」

明久「先生！読者って何のことですか！？」

「ななこ、んゝあんまそこところは気にしんといてやゝ。んじや自己紹介してもらおうか。」

「あ、あの…南夜神楽と言います…。よろしくお願いします…」

信童「何でお前が来てるんだ！？あれは！？狂撃隊はどうした！？」

秋神「そのことか？全部スバルに任せてある。あとあいつらもちよっと離れた街で住んでいるぞ。」

6人「マジデスカ！！」

秋神「マジ。」

南夜「あ、あの…私の方は…。」

秋神「で、誰？」

智「私たちの家にいる霊。」

麻衣「まあ幽霊だけどほとんど人間に近いけどね。」

秋神「へえ…。」

南夜「あ、あの…あんまり見ないでください…恥ずかしいです…。」

信童「…はあ…。」

また、騒がしくなりそうだ…。

オリキャラ紹介

なんよ かぐら
南夜神楽

年齢：????（死んでからは400年以上は経っている）

誕生日：????

性別：女

髪：ロングヘアーで藍色

目：茶色

性格：引っ込み思案で恥ずかしがり屋

すでに死んでいる西兎家に憑いている幽霊。幽霊なので壁をすり抜
けられるし、他の人に取り憑いて操ったりもできる。機械音痴。

あきがみりようへい
秋神涼平

年齢：17歳

誕生日：11月23日

性別：男

髪：こなたに似ていて赤色 アホ毛はこなたよりは小さい

目：青色

性格：穏やか

6人の先輩みたいな存在の人。何かの組織の一番上の存在の人らしい。影は薄い。そのためあまり話に参加できてなかったりする。足、持久力ともかなりすごい。頭は普通。

二人の転入生（後書き）

次回、街に出かけます。

街へお出かけ！（前書き）

サブタイ通りです。

街へお出かけ！

河村「街、ですか…。」

つかさ「そうなんだよ。あそこで一緒にお買い物しようよ！」

影久「そう言えば前に秋神先輩が言っていたね。」

智「アキラさんが向こうで仕事をしているって。」

みゆき「あの～そのアキラさんって誰ですか？」

影久「スバル・アキラ。狂撃隊第1副長にして実力は秋神先輩を超える転生者。」

ヒナギク「て、転生者！？」

影久「そう！あと狂撃隊つてのは秋神先輩を中心に結成した組織だよ。」

唯「へ～あの男の子そんなにすごいんだあ～。」

大河「ふ～ん…そんな風には見えないけどな…。」

律「んで街での買い物の話は？」

影久「あ！そうそう。どんな所か気になるよ。」

唯「じゃあ明日行こうよ！」

大河「べ、別にかまわないけど…。」

つかさ「じゃあお姉ちゃん呼んでくるね。」

こなた「ゆーちゃんも呼ぼうかな…。」

律「よし！明日学園前に集合な！」

次の日

律「全員集合したか！？」

こなた「うん、全員いるよ。」

メンバー

河村亜由 影久愛 西兎麻衣 西兎智 羅井野美宇 平沢唯 田井
中律 秋山澪 琴吹紬 中野梓 平沢憂 泉こなた 柊かがみ 柊
つかさ 高良みゆき 小早川ゆたか 岩崎みなみ 綾崎ハヤテ 三
千院ナギ 桂ヒナギク 高須竜児 逢坂大河

律「よし、街に行くぞー!!」

女子全員「おー!!!!」

ハヤテ「何で僕らまで…?」

竜児「さあ…。」

――涼上ノ市――

影久「おお…!」

河村「広いですね…。」

智「これ迷子になっちゃうよ…。」

麻衣「いろんなお店があるわね…。」

羅井野「で、どこに行くんですか?」

律「えっと…この近くだとこの新しくできたドーナツ屋さんがいい

んじゃないか？」

唯「おー！ドゥナツゥ…。」

こなた「じゃあ行こうか。」

信童「街…でけえ…。」

秋神「ま、君たちがいたところよりは大きいかもね。」

現在俺、信童穂月は秋神先輩に案内させてもらっている。なぜ案内されてるかって？

ここは初めて来たからだ。

と、俺たちのもとに…。

？「あれ？君たち確か2年生の転校生？」

女子3人が寄ってきた。

信童「え、あ、うん…そうだけど…。」

？「私は3年生の高町なのは。よろしくね。」

？「私はフェイト・T・ハラウオンです。」

？「八神はやてって言うんや。よろしくな。」

信童「あ、うん…よろしく…。」

なのは「この街のことは私たちがよく知ってるから案内してあげようか？」

信童「えっ！？あ、今は先輩に…ってあれ？先輩？」

横に先輩がいなかった。足もとに手紙がひとつあった。

中を取りだして読んでみると…。

『ごめん、ちょっと急用ができちゃって僕は先帰るから。じゃあばいばい。』

秋神涼平』

せんばああああああい！！！！

なのは「？どうしたの？顔赤いよ？」

信童「い、いや…赤くなっていませんよ！」

ちよっとおおおお！！！！これどうすんだああ！！！！？？？

なのは「ねえ…ほんとに大丈夫？」

信童「エッ！？ダ、ダイジョウブデスヨ！！」

はやて「片言やないか。」

フェイト「でも大丈夫って言うてるんだから別にいいんじゃない？」

なのは「そうなの？」

信童「大丈夫です！」

なのは「じゃあ行こっか。」

信童「え、ちよっと…。」

？「あ…うまい肉ねえかなあ…。」

？「ずっとそれ言ってるね…。」

？「だってよ…せっかく街に来たんだしよ…なんかうまい店ないかなあ…。」

？「誰かに聞いてみる？」

？「そうだな。」

信童「ゲーセン…。」

なのは「うん。ゲーム嫌い？」

信童「い、いや、嫌いじゃないけど…。」

なのは「じゃあ入ろっか。」

信童「わ、わああ…。」

？「あの…すいません…。」

フェイト「はい、何ですか？」

？「おいしい店って知ってませんか？僕たちここにはじめて来たものでよくわからなくて…。」

なのは「そうなんですか。だったらここはどうですか？」

フェイト「行き方はこうで…。」

？「あ、ありがとう！」

なのは「ううん、気をつけてね。」

？「ばいばい！ほら、行くよ！」

？「ハイハイ。」

なのは「私たちも行こっか。」

はやて「そやな。」

？「それにしてもさっきの子…可愛かったな…。特に金色の子…。」

「

？「ピット…顔が赤いぞ。」

ピット「へっ！？えっ！？やだなあ…アイク…からかつなんて…。」

「

アイク「俺はありのままのことを言ったんだが？」

ピット「へ！？うん…。」

アイク「凶星、だな。」

ピット「う、うるさいよ！」

ヒナギク「おいしかったわね。」

ナギ「次はどこに行くのだ？」

こなた「このショッピングセンターでお買い物しよう！」

智「賛成！」

なのは「…すごい。」

はやて「なんちゅーうまさや。」

フェイト「これ…こうちゃんやひよりちゃん超えてるんじゃないの？」

ちなみに、今現在彼女らが見ているのは『太○の達人』をプレイしている信童の姿だ。

鬼の○想○興曲をプレイ中だがミスひとつをしていない。

「結果発表！…119万2350点！フルコンボ！ハイスコア、更新！」

信童「ふう…。」

なのは「すごいよ！信童君！」

はやて「まるでプロ並みのうまさやなあ。」

フェイト「いやもうプロなんじゃない？」

信童「え〜と…2曲目は…これだ！」

大河「りゅ、竜児…これ似合う？」

竜児「似合うんじゃないか？」

大河「そ、そうか…。」

ナギ「ハヤテ！これどうだ！？」

ヒナギク「綾崎君、これどうかしら？」

ハヤテ「え、えっと…お二人とも、にあいますよ…。」

唯「いい感じになってるね〜。」

紬「あそこでああなってあそこがああなったら…っふふ…。」

つかさ「！？何か妄想してるよ！？」

なのは「遊んだね」。

フェイト「楽しかったよ！」

信童「こ、こちらでも楽しかったです…。」

はやて「またよかったら遊ぼうな！」

なのは「じゃあね」。

信童「じゃあ…。」

…幸せな1日だった…。

影久「いやあ…いっぱい買ったなあ…。」

かがみ「こなた…またあんたは…。」

こなた「かがみんもかがみんでいろいろ買ってるね」。

かがみ「かがみんって言うなー!!」

唯「ギー太〜。」

憂「お姉ちゃん…。」

今回の1日は終わりました。とっても楽しかったよ！

河村亜由

街へお出かけ！（後書き）

長かった～疲れた～。

訪問者（前書き）

狂撃隊の面々…そろそろ出そうかなあ。

訪問者

？「ふん、ここがそうなのか…じゃ、入らせてもらおうか。」

現在午後3時47分。生徒たちは授業が終っている。

—学園長室—

トントン

紫「はいはい、どうぞ。」

？「遊びに来ました。」

？「こんにちは。」

紫「あら！久しぶりね。」

？「いやあ…会いたくなってきたね、あとどんな人がいるか気になるし。」

？「まったく…それなら他の人もつれてきたらどうなんですか？」

？「いや、聞いてみたら行きたくないって言うから。」

？「はあ…そうなんですか…。」

紫「あはは…。」

トントン

河村「学園長、失礼しま…どなたですか？」

紫「ああ河村さん、この子は私の友人のレミリアちゃんよ。」

レミリア「へえ、あなたこの生徒なんだ。よろしく。」

河村「（悪魔の翼？みたいなのが生えてる…。）あ、よろしく願います。」

？「私は十六夜咲夜です。」

河村「あ、よろしく願います。」

レミリア「八雲、ちよつと中見てきていいかな？」

紫「別にいいわよ。河村さん、ちよつと学園内案内させてあげて。」

河村「ふえ！？え、別にいいですけど…。」

紫「あなた転校したばかりで分からないと思うから地図上げるわね。」

河村「あ、ありがとうございます…。」

紫「それじゃ、よろしくね。」

レミリア「へー！あなた転校生なんだ！」

河村「はい。私のほかにも7人もいるんですよ。」

十六夜「皆さん友達ですか？」

河村「はい。」

と、3人のもとに…。

？「ちょっとあんた！」

レミリア「ん？何？」

？「その翼…見た所悪魔か何かね…話聞かせてもらっていいかしら？」

レミリア「なあ河村、こいつ誰？」

？「こいつ？失礼ね、あたしは涼宮ハルヒって名前があるのよ！」

レミリア「（こいつ何？変人？）」

河村「（学園内1のね…。）」

十六夜「（面倒くさいのにあってしまいましたね。）」

ハルヒ「私はね、SOS団の団長なのよ！とにかくあたしの…。」

と、ハルヒのもとに一人の男子が現れた。

？「おいおい何絡んでんだよ…。」

ハルヒ「あつ、キョン！この子を私のSOS団に入隊させたいと思うの！どうかしら？」

キョン「いや嫌がつてるだろ。ごめんな、うちのハルヒが迷惑かけて。」

レミリア「なあ河村、別の場所に案内させてくれない？」

河村「いいですよ。ではこっちに行きましょう。」

ハルヒ「あ、ちょ、コラア！」

レミリア「ここは何だ？」

河村「ここはね、生徒会室と言ってみんなのために頑張ってる人たちがいるの。」

レミリア「へー！」

河村「あの～お邪魔します…。」

ヒナギク「あら河村さん！」

河村「ヒナギクちゃん！」

ヒナギク「？そちらの方は…。」

レミリア「学園長の友達のレミリアです！」

十六夜「十六夜咲夜です。」

ヒナギク「私は桂ヒナギクよ。よろしく。」

？「お？なんだかいろんな人が来たね」。ヒナギクちゃん、誰その子たち？」

ヒナギク「私の友達の河村さんと学園長の友達です。」

河村「河村亜由です。よろしくお願いします。（小学生？）」

レミリア「レミリアです！（小学生がいる！当たり前のようにいる！）」

十六夜「十六夜咲夜です。（ほんとに小さいお方…。）」

？「私はねー桜野くりむって言うんだよ！」

河村「そうですか？よろしくお願いします。」

レミリア「もうここはいいな。別の所に行きたい。」

くりむ「あ、私の友達も紹介するから！」

レミリア「いや、別にいい。」

くりむ「えー!!」

河村「あ、では…失礼します。」

レミリア「…お？2年3組…。」

河村「この教室で、勉強するんだよ。たまに部屋移動もするけど。」

レミリア「誰がいるのか？」

河村「授業も終わったし、みんな帰ったと思うけど…。」

？「いやゝにわ君はこつゆつのが好きなんだね。」

？「リュウシさん、そんなに気になりますでしょうか？」

？「うん！あとリュウコやつちゅーに！」

レミリア「へ〜いい関係だねえ。（にやにや）」

？「ぬっ！？何奴！？いつからそこにいた！？」

レミリア「さつきから。」

？「あの…河村さん？その人たちは…」

河村「あ、学園長の友達です。」

？「俺は丹羽真です。」

？「御船流子です！」

十六夜「しかし、お二人は仲が良いですね…。」

流子「！？」ボン

真「あの…リュウシさん？顔赤いですよ？」

流子「か、顔は赤くない！それとリュウコやつちゅーに！」

レミリア「…ふふ、なんだかんだでここもいいものだな。」

十六夜「そうですね…。」

レミリア「なんだか満喫したな…ありがとね、案内してくれて。」

河村「あ、いえいえ。」

レミリア「…そろそろ帰るとするか…じゃあな！」

河村「さようなら。」

レミリア「またいつか来るからな！」

十六夜「それまで……お元気で……。」

訪問者（後書き）

信童「？なんだここは…。」

麻衣「どうやら何かの場所みたいよ。」

信童「なんだそりゃ。」

麻衣「でも何の場所かは決まっていらないわ。」

信童「おいおい…。どうすんだよ…。」

麻衣「でもね…できれば他のさ…。」

信童「おいしい！！これまだ10話行ってねえのにんなこと言うな！！」

麻衣「え〜…。」

信童「無駄話しすぎたな。では次回。」

麻衣「バイバイ。」

過去（前書き）

今回は、少し暗い話です…あと長いです。

過去

キンコンカーンコン…。

ななこ「んじゃ、今日のじょ行はここまでや。帰り気いつけや。」

河村「さて、と…。」

皆さんこんにちは。河村亜由です。今授業が終ったので帰ろうと思っ
ています。さて、どうしようかな…。と、思った時です。

？「うわああ！おいちよつと待てって！！」

？「そう言われて待つやつはいないわ！待ちなさい！」

…？誰でしょうか…。

アリア「この声は…またあいつらね…。」

大河「まったく全然変わんねえな。」

河村「ねえねえ、その人たちって…？」

アリア「あ、亜由ちゃんは転校してきたばっかだからわかんないか。」

大河「簡単に言えばお似合いカップル、みたいな感じか？」

河村「…？」

で、その二人が私たちの教室に来て…。

？「うおわああ！！！」

？「くらいなさい！超電磁砲^{レールガン}！」

ドッカーン！

教室の辺り一面に煙がたちこめました。

河村「ええええ！！？？あの人電撃出してたよ！？で、こけた人もろにくらっちゃったよ！？」

アリア「大丈夫よ。ほら。」

煙が晴れると右手を突き出している男子がいました。頭はつんつんしている子です。

アリア「当麻く美琴くこの教室で暴れないでよ…。」

美琴「まだ勝負の決着はつけてないわ！あんた、今日こそは決着をつけてやるわよ！」

当麻「はあ…お前の勝ちでいいって言ってるだろ！？」

美琴「そんなんじゃ気が収まらないわ！」

智「何々？何の騒ぎ？」

麻衣「教室めちゃくちゃじゃない！何があつたの！？」

信童「うるせえ…。」

影久「眠い…。」

羅井野「あら、仲のいいお2人ですね。」

美琴「それは私たちがカップルに見えてるってことかー！？」

アリア「落ち着きなさい美琴。この子たち転校してきた子たちなんだから。」

美琴「…え？あの？」

アリア「そうよ。」

河村「あ、私河村亜由つて言います。」

影久「私は影久愛つて言うんだよー！」

信童「信童穂月…。」

麻衣「西兎麻衣です。」

智「西兎智だよー！」

羅井野「羅井野美宇です。」

美琴「私は御坂美琴よ。学年は1年3組だわ。」

当麻「俺は上条当麻。よろしくな!」

影久「(頭つつんだね。)」

麻衣「(とある魔術の禁書目録の当麻だ!やっぱり不幸だ!)」

智「(かみヤンだ。)」

羅井野「(女の方はいじめがいがあるわ…。情報収集しなくちゃね。)」

信童「(…こいつ、あいつにそっくりだな。)」

河村「…。」

お兄ちゃん…。

美琴「…さあ!外で続きをやるわよ!」

当麻「ちょ、それは…勘弁してくれ!」

美琴「あ、コラ逃げるなあー!!!!」

当麻「不幸だあああああああ！……！！！！！！！！！！」

アリア「…行っちゃったわね…。」

大河「台風みたいなやつらだったな。」

河村「…。」

信童「（やっぱり、あの事を…。）」

ヒナギク「またあの二人が来たのね…おかげで教室めちゃくちゃね…で、どこ行っただの？」

大河「逃げて行っただぜ。」

明久「外に行っただよ。」

ヒナギク「まったく…少しは成長しないのかしら…？河村さん？どうかしたの？」

河村「えっ！？いや、あの…何でもないです…。」

大河「そっぴや当麻見た時から暗くなってたな？」

ヒナギク「そうなの？ねえ、隠してる必要があるなら私に話して。」

河村「…わかりました。話します…。」

信童「！あれを話すのか…？」

河村「友達に、隠し事はできない…。」

信童「そうか…。」

ちなみに、今この場にいるのは転校生6人とアリア、ヒナギク、大河、明久の10人だ。

ヒナギク「…で、一体何があつたの？」

河村「私がここに転校してくる前は家族と暮らしていました…。」

2つ上のお兄ちゃんがいて、お母さんとお父さんがいて、1つ下の妹がいて、私がいました。

何事もない幸せな家族でしたが私が中2の夏のある日…。

その日は、車で映画を見に行って、帰る時でした。すでに周りは暗くなっていました。

兄「いやあゝ今年の映画もよかったなあゝ！」

妹「そうだね！」

河村「そうだねえ。」

母「来年もあるんでしょう？また見に行くの？」

兄「もちろん！なんせ俺は大のポケ○ンファンだからな！」

父「ははは…。」

楽しそうに帰っている時でした…。

母「ふふふ…！？ちょっと、この人たち何！？」

河村「え？」

私が外を見ると何台かの若い人たちがバイクに乗って私たちの車を囲んでいました。そう、暴走族です。

母「ちよつと、あんたたちなんなの！？」

若者「ああ？」

若者「おい何だババア！俺たちに口出しすんじゃないやねえ！おらあ！」

ガン！

その若い人たちは私たちが乗ってる車にバイクをぶつけて来たのです。

母「…！ちよつと何するのよ！」

若者「俺たちに口出しするからいけねえんじゃないやねえか！もっとやっちゃまえー！」

若者「ひゃっはー！」

若者「おらあー！」

何回もぶつかってきました。そして、曲がり角が迫ってきたとき…。

若者「ひやははー！」

ガン！

父「くっ…！不味い！」

ガッシャーン！

私たちの車が、曲がり切れずにガードレールにぶつかりました。

若者「おい、どうすんだよ…。」

若者「し、知らねえぞ！こいつらが勝手にぶつかったんだ！」

若者「おい！警察来てるぞ！逃げろ！」

若い人たちはその場を逃げだしました。

父「…おい皆、大丈夫か？」

母「え、ええ…。」

妹「だ、大丈夫…。」

河村「私は大丈夫だよ…お兄ちゃんは？」

兄「頭を少し打っただけだ…。」

河村「よかったあ…。」

その後、私たちは警察の人に事情を説明をして、自宅まで送ってもらいました。その時はみんな無事でした。

が…その数日後…。

兄「う…ぐあ…。」

ボタン！

河村「お、お兄ちゃん！？」

突然、お兄ちゃんが倒れました。原因は先日頭を打ったことによる脳出血。そして、病院に搬送されましたが、兄は病院先で息を引き取っていました。

河村「お兄ちゃん！お兄ちゃん！目を覚ましてよ！ねえ！」

兄「…。」

河村「だから…あの事を思い出しちゃって…」

大河「…なんか聞いちゃいけなかったな…」

河村「そ、そんなことないよ…」

明久「…お兄ちゃんの名前って何？」

河村「名前…うん、教えてあげる…けど、びっくりしないでね…」

ヒナギク「うん、いいわよ…」

明久「びっくりしないよ！」

河村「じゃあ言うね…」

河村…大河…」

全員「……………」

大河「あ、あたし…の名前と同じ…？」

河村「うん…」

ヒナギク「だから…最初…」

明久「名前聞いてびっくりしてたのは…」

河村「あの、名前なんて言うの？」

大河「あたしか？あたしの名前は逢坂大河だ。」

河村「！？逢坂……。」

大河「逢坂大河。それがあたしの名前。」

河村「…そ、そうなんだ！よろしくね！」

明久「（妙にびっくりしていたな…何かあるのかな…？）」

河村「…あ、暗くなりすぎたね！みんなでおいしいもの食べに行こうよ！」

ヒナギク「…そ、そうね。」

大河「じゃ、じゃあこの前行ったドーナツ店はどうか？」

影久「あ、いいね！行こうよ！」

「あ……。」

全員「！！！」

当麻「やっべえ…さっき飛ばされた時靴脱げてたわ…。お、あった！」

全員「…。」

当麻「…何だ？俺の方見て…。」

明久「い、いや別に…。」

当麻「そうか？じゃあ気をつけて帰れよ！！！」

明久「あ、ありがとう…。」

河村「…。」

お兄ちゃん…私お兄ちゃんがなくなった時、すごく悲しんだよ。
でもね、私が悲しんでる姿見たらお兄ちゃんも悲しむんだと思うんだ。

だから私泣かずに生きていくよ…お兄ちゃん分も…。

こんなに…友達できたし…。

だから…がんばっていくよ！

—???

？「いいんですか？折角天使になれて妹ちゃんと会えるって言うのに…。」

今、喋ったのは背中に羽が生えた茶色髪青年、前回街にいたピットである。

？「いや、ここから見守っていたんです。」

そう言ったのは上条当麻そっくりの人物、この人こそが河村亜由の兄、河村大河である。

ピット「な、何ですか…？会ってみたくないんですか…？」

大河「会いたいのは山々ですが…あいつは悲しまずに生きていつて

るんです。だから俺も悲しまずに生きていきたいんです。あいつは俺無しでも大丈夫なんです。俺はあいつの頑張りを見守りたいんです…。」

ピット「そ、そうなんですか…。」

？「ピットー大河くーん！」

ピット「あっ！パルテナ様がお呼びになってる！早く行かないと！おい！行くよ！」

大河「…さてと…俺も行くか！」

亜由「俺もお前と会えなくなっですごくさびしいし、悲しいんだ。でも、お前が頑張ってるなら俺も頑張らないとな。」

だが「…いつか会える日を…楽しみにしてるぜ…」。

新住人（前書き）

新しいオリキャラが出ます。

新住人

信童「はあゝ…今日も授業終わったなあゝ…。」

よお、信童だ。今俺は授業が終って教室に戻っているところだ。

信童「何をやるのかなゝ…。」

と、考えている俺に…。

羅井野「あら信童君じゃない。何してるの？」

信童「羅井野か…お前こそ何してるんだ？」

羅井野「暇だからぶらぶらしてたの。」

信童「そうか。じゃあな。」

羅井野「あ、ちょっと…。」

信童「なんだよ…。」

羅井野「あなたの部屋でくつろがせてくれないかな？」

信童「…はあ？」

羅井野「信童君たしかあれ持ってたでしょ？あれで対戦しましょうよ。」

信童「あれな…いいぜ。今日は俺が勝つ！」

羅井野「いいえ、あたしよ！」

〈信童の部屋〉

羅井野「じゃあ…バトルスタートよ…。」

今は俺の部屋にいる。もちろんゲームでバトルしている。
え？何でバトルしてるかって？…ス○Xだ…。

キャラか？俺はア○クで羅井野は○ツトだ。

信童「おらおらおらおら！！！」

羅井野「そんな闇雲に攻撃しても当たらないですよ？ほら！」

信童「うおっ！…くそ…これならどうだ！」

羅井野「くっ…少しやられたようね…でもこのコンボあなたに避けられるかしら！？」

信童「あっ！不味い！」

羅井野「いまさら遅いわよ！」

信童「やべえ…104%…123%…どんどん行く…。」

羅井野「…とどめ！」

信童「でもまだまだ！」

羅井野「緊急回避…！隙が…。」

信童「大逆転じゃあー！！！」

羅井野「少しは頭を使ったようね…でもまだまだ甘いわ…。」

信童「あつ、かわされた…やべえ…。」

羅井野「今度こそ終わりよ！」

信童「うわあ…！」

「WIN プレイヤー2！」

信童「あー！！！！また負けたー！！！」

また負けた……つたく、昔から強いんだよな…。

羅井野「あなたの攻撃方法は昔からわかってるのよ。ふふふ。」

信童「あゝむかつく…！」

羅井野「もうちょっと鍛えたらどうかしら？負け犬君？」

信童「うっさいこのドS野郎！」

羅井野「あゝら？そこにひれ伏せて頭床になすりつけてあたしに頭足に踏まれながら「羅井野さん、この僕のようなクソ犬を勝たして下さい！」って言ったらいいわよ？」

信童「それを言うようだったら自分で鍛えるわ！」

羅井野「あゝあ…せつかくチャンス与えてあげたのに…。」
「言い始めたんだっけ？」

羅井野「あゝあ…せつかくチャンス与えてあげたのに…。」

信童「それチャンスじゃなくて調教みたいなもんだろ！」

羅井野「そう？」

信童「そうだよ！」

ドサッ

羅井野「？今…玄関で何か倒れた音しなかった？」

信童「したな…。」

羅井野「ちよつと見てくる…。」

信童「あ、俺も！」

羅井野「…あの、大丈夫？」

俺たちの前に倒れていたのは3人の女子だった。ただ呼びかけても反応が無い。

信童「…とりあえず、俺の部屋に…。」

羅井野「え、ええ…。」

羅井野「…で、誰この人たち？」

信童「いや、知らねえよ…。」

俺の部屋に運び込まれた女子は一人は黄色の短髪で、身長は155あたり。

で2人目はメガネをかけていて髪はちょっと癖があって短髪の青緑色。身長は160あたりぐらい。

で、3人目はポニーテールで薄紫色。で、身長はかなり高く多分俺よりも高いと思う。で…。

羅井野「…。」

信童「…どうした？」

羅井野「このポニテの人…私よりも大きい…」

（どこかは察して下さい。）

かなりスタイルはいい。モデルやってんじゃないかと思う。

信童「…気にしてるのか？」

羅井野「はあ！？ば、バツカじゃないの！？気にしてるわけ無いでしょー！！」

信童「素直になれって。」

羅井野「素直じゃボケエー！！」

ボカツ！

信童「みぎゃあああ！！！！」

？「…うん？ここどこ…？」

羅井野「あ、今殴った音と叫び声で黄色の子が起きたよ。」

信童「頭いてえ…。血出てない？」

羅井野「ねえ、あなた誰？」

信童「おーい、無視するな！。北極大陸に防寒着0で置いていつてやろつかー。」

？「私：榊城灯。^{さかきじあかり} ねえ、ここどこ？」

信童「話を進めるな。此处は俺の部屋。で、お前らは何をしていたんだ？部屋の前で倒れていたぞ。」

榊城「ええと…全然覚えてない…。」

信童「はあ？そんなわけねえだろ。」

榊城「ごめんなさい…本当なんです…。」

羅井野「あまり攻めるのはよくないわ。とりあえず本当みたい。」

信童「そうか…じゃあ後ろのやつから聞いてみるか。」

羅井野「起きてくれない？ねえ…。」

？「…ここは…。」

？「！誰だお前たち！」

信童「いや、あの…怪しいもんじゃないから安心しろ…。」

羅井野「あなたたちが倒れていたから助けてあげたのよ。」

？「そうなのか？…それはすまない…。」

信童「謝るのはいいから…名前教えてくれないか？」

？「私か？私は柊^{ひいらぎつき}月だ。」

？「水無月胡桃。
みなづき くるみ」

信童「ふん…で、何であそこで倒れてたの？」

柊「いや、それが…何も覚えてないんだ。」

水無月「同意見。」

信童「なあ…記憶喪失ってやつか？」

羅井野「そうじゃないかしら…何も覚えてないんだし…。」

信童「覚えてるの自分の名前だけか？」

柊「いや、こいつとこいつはなんとなくだが親しかった気がする…。」

榊城「私も思っていました。」

水無月「同意見。」

信童「そうか…。」

水無月「…。」

柊「なんだ？…ふん、ふん…。」

信童「なんて言ったんだ？」

柊「四字熟語も覚えているそうだ。」

信童「そう…。」

柊「私からも聞きたいのだが…。」

羅井野「何かしら?」

柊「私たちはこれからどうすればいいのだ?」

信童「確かに…住む場所も食べるものも…。」

羅井野「それだったら此処に住めばいいんじゃない?」

柊「!? 此処にか…?」

羅井野「ええ…何も無いって言うんだったら信童君がやってくれるだろうし…どうする?」

柊「此処にすましてくれるって言うならありがたいんだが第一迷惑じゃないか?」

羅井野「大丈夫よ。部屋も広いし…。」

信童「まあ…何も無いってんなら…別にいぞ。」

柊「本当か!? 感謝する!」

榊城「ありがとうございます!」

水無月「感謝。」

羅井野「決まったようね。じゃあ私は部屋に帰るから、みんなで頑張つてね。」

信童「もう帰るのか？」

羅井野「ええ。あとは自分の部屋でゆっくりするわ。」

信童「そうか…じゃあな。」

羅井野「またね。」

カチャ…。

信童「さあて…どうしようかなあ…。」

柊「私たちに手伝えることがあったら何でもするぞ！」

榊城「此处に住ましてもらっているから…。」

信童「今は何もないから…ゆっくりしていいぞ。」

柊「そうか？ならゆっくりさせてもらうが…。」

榊城「じゃあ邪魔にならないように…。」

信童「これからどうしようか…。」

信童穂月の部屋に3人の住人が増えました。

さかきしあかり
榊城灯

年齢：???（見た目16歳ぐらい）

誕生日：????

性別：女

髪：黄色の短髪

目：赤色

性格：明るく素直

記憶を失っている女子の一人。明るく素直でいろいろなことに一生懸命に頑張る。見た目からは想像できないほどの大食い。

みなづき くるみ
水無月胡桃

年齢：???（見た目17歳ぐらい）

誕生日：????

性別：女

髪：青緑色で短髪でちよつと癖がある

目：藍色

性格：無愛想だけど照れ屋

記憶を失っている女子の一人。普段は眼鏡をかけている。無口で無表情と無愛想だが褒められることにはなれていない照れ屋。喋るときは単語だけで喋る。ちなみに四字熟語をよく喋る。

ひいらぎつき
柊 皋月

年齢：???（見た目21歳ぐらい）

誕生日：????

性格：女

髪：薄紫色でポニーテール

目：茶色

性格：真面目で義理堅い

記憶を失っている女子の一人。真面目で礼儀正しく義理堅い性格。
男らしい口調をしている。やや戦闘狂っぽい。本人は無自覚らしい
がややSっぽい所あり。

お出かけ（前書き）

最近長編を考えています。

どんなのにしようかな…。

お出かけ

チュンチュン…。

信童「…ふあゝ…朝か…今日は休みだな学園は…何しようか…。」

今は朝8時か…なんか向ここの部屋からいいにおいがするな…。

信童「何の匂い…!」

榊城「あ、信童さん、起きたんですか。」

柊「とりあえず教えてもらった通りにしたぞ。」

水無月「食事。」

信童「おお…すごいじゃんか。昨日教えただけでもう料理ができるなんて…。」

ん？こいつらか？俺のところでは預かっている奴らだ。

信童「早速食べるか…。」

4人「いただきます。」

信童「どこ出かけようかな…そう言えばあんまり此処と街以外知らないな…一回聞いてみるか…。」

明久「それで僕の所に聞きに来たの？」

信童「悪いかな？」

明久「いや、別に悪くないけど…まあ来たばかりだから知らないこともあるし、教えてあげるよ。」

まず僕たちがいるのは『光星市』ってところだよ。」

信童「光星市？この学園がある場所か？」

明久「いや、この学園もそうだけど街とかその付近の場所とかもいろいろ入れて光星市だよ。」

信童「…だいぶ広いな…。」

明久「光星市の中央にある街なんて僕たちの学園の何倍以上もあるからね。（何倍で済むかな？何十倍の方がいいんじゃないかな？）まあ地図で説明するから。」

信童「あー…この学園南側にあるんだな…。」

明久「この学園は生徒数が一番多い学園として有名なんだ。」

信童「そうか…俺はここの学園と街に行ったことはある。そのほかの所を教えてください。」

明久「そうだね…まずは街の東側にある此処かな。」

信童「此処は…どうゆう場所なんだ？」

明久「此処は『江戸ノ町』と言って昔の感じが残っている町だよ。」

信童「（銀魂みたいな所か…。）」

明久「此処は変な人とかがいっぱいいるけど結構楽しい所だよ。あと…この町を北の方に進むと森が広がっていてその中に博麗神社って所があるんだ。まあ、見かける人は少ないけどね…。」

信童「ふうん…。」

明久「で街の北側は山で噂だとあそこには湖の近くにお屋敷があるって言われているんだ。本当かどうかは知らないけど。」

信童「屋敷ねえ…。」

明久「…で東南側は工場地帯だね。あそこは入れない場所もあるから基本的には近づいちゃいけない所なんだ。西南側は田んぼとかがある田舎みたいな所だね。北西側はリゾート地みたいところかな。」

信童「じゃあ金持ちのやつとかいるのか？」

明久「さあ…僕は全然わからないよ…。」

信童「とりあえずありがとうな。」

明久「いやいや…。」

と、言うわけで…。

信童「江戸ノ町にやってきたぞ。」

今、俺たちは江戸ノ町にいる。あとのやつらは預かっている奴三人だ。

榊城「へえ…なんだか楽しそうなところだね。」

柊「どこに行くんだ？」

信童「この…お団子屋さんがお勧めって聞いたから…ここにしよう。」

榊城「私、みたらし団子が食べたい！」

水無月「餡子。」

柊「私もみたらしで…。」

信童「わかったわかった。向こう着いたら頼んでやるから。」

榊城「やったー！」

信童「此処か…すいませーん。」

店員「はい。」

信童「みたらし2つと餡子2つください。」

店員「はいはい。かしこ参りました。」

榊城「一体どんなだろうね。」

水無月「期待。」

柊「楽しみだな…。」

店員「お待たせしました。」

信童「じゃあいただくか…。」

榊城「んぐんぐ…！すっごく美味しい！」

水無月「…。（笑顔）」

柊「ほお…これはうまいな。」

信童「お茶もあるぞ。」

柊城「あゝ…おいしかった…。」

信童「食べるの早!」

柊城「もう1個ない?」

信童「俺の餡子上げるから…。」

柊城「わあゝい、ありがとう!」

信童「あゝ…お会計…。」

店員「はいはい…全部で340円です。」

信童「はい。」

店員「ありがとうございます。」

信童「帰るか?」

柊城「えー!まだお団子しか食べてないよ?もうちょっと満喫したい!」

信童「あゝ…じゃあゲーセン行くか…。」

柊城「よし、そうと決まったら行こう!」

信童「おい、ちょっと…勝手に行くなあ！」

柊「…やれやれ…。」

―???―

ガシャン！

？「…やっぱりそうか…。」

とある建物の中に一人の人影があった。薄暗くてよくわからないが声からして女性のような声だ。

？「此処は…普通の工場なんかじゃなかったな…人造人間実験を行っている場所…。しかしすでに全部なくなっている所から見るともぬけの殻か…。」

工場の中はたくさんのガラス管があった。ほとんどは何もなかった。しかし、ひとつだけ、ガラス管の中にある液体に何かの姿があった。

？「…何だこれは？人が入っている…そうか、これは人造人間か…。」

そこには金色の髪をしていて、眠っているように目を閉じている裸の少女の姿があった。

？「多分逃げる時に忘れられていったんだろうな…これは…報告書…。」

中にいる人は地面にあつた紙を手にとった。

？「『魔眼の実験体は他のと比べ、生育が遅れているため、戦力外と判断され、この場所に置いていくことになった。』」

ポチッ

？「？」

工場の中にいる人は寄りかかろうとしてガラス管の前にあるたくさんボタンのうちの一つを押してしまった。すると、ガラス管が割れ、中の少女が地面に倒れた。すると少女は顔を上げ、目を開いた。

少女「…う…うう…。」

？「やべえ…出しちゃったよ…でもどうする？このまま放っておくわけにもいかないし…。」

中にいる人は少女と目があつた。少女の左目は緑色で、右目は禍々しい赤色をしていた。どうやらこの禍々しい赤色をしている目こそ、報告書に書かれていた魔眼らしい。

？「これが魔眼か…。『この実験体の魔眼は目が合った者を自分の思いのままに操れるようになる。』ふうん…まあ俺には全然効かないけどな。しかしどうしようか…。」

目の前にいる少女を見つめている。少女は目の前にいる人を不思議な物を見るように見つめていた。

？「…仕方ない…連れて帰るか…。」

少女「…？」

？「お前、俺の所に来ないか？楽しい所だぞ。みんなお前を歓迎してくれるさ。」

少女「…。」

少女は連れて行ってほしいと言っているように目の前の人に抱きついてきた。

？「そうかそうか…よし、調査は終了した。出て来いド……ラ…！」

女性と少女は女性が出した巨大なカラスに乗り、空を飛んで、街の方向に帰って行った。

？「あとで眼帯つけてやらないとな。あ、名前…どうしようか…。」

この工場にいた女性の姿は黒い服を着ていて、顔は正面から見ると髪の色は左側が白色で右側が黒色と分かれていて目は左目は金色で右目が銀色のオッドアイだった。

そして、顔つきはSOS団の団長涼宮ハルヒにそっくりだった。

？「秋神局長になんて言おうかな…許してもらえるかな…。」

そして、二人がいた工場は二人が脱出してから1時間後に大爆発をした。

そのころ、無敵光星学園でとある事件が起きようとしていた。

だがこれは、また別のお話。

謎の影（前書き）

この小説でポケモンを登場させてみようかな～と思います。

理由は作者がポケモン好きだからです。あと登場させたらどうなるかな～と思ったからです。

今回では出ませんがこれから出てくると思います。（誰かの手持ちとして。）

と、言うわけでよろしくお願いします。

謎の影

河村「今日も授業終了つと…。」

影久「亜由…。今日亜由の部屋でこれ仕上げたい！」

河村「あ、部活の…いいよ。」

影久「やりいー！」

――河村亜由の部屋――

さーて…さっそく始めようかな…あれ？

河村「…あれ？財布…無い…落としちゃったかな…？」

影久「ええ！？どこで落したの！？」

河村「えーと…購買に行ったところまではあったんだけど…。」

と、その時。

？「おい、河村！。入っていいか？入るぞ！。」

誰かがやってきました。

河村「あ、その声は…国語担当の周防先生^{すおう}。」

この人は周防先生。国語の先生で私たちとは仲がいい男の先生です。

周防「これお前の財布か？購買付近で落ちてたぞ！。」

河村「あ、ありがとうございます！わざわざ届けに来てくださって…。」

ただ、普通の人とちよつと違う所は…。

周防「気にすんなって。落し物を届けたただだから。今度からちゃんと見はつとけよ。あ、見はつとけじゃないか。気をつけるか。」

少し喋り方に特徴があるだけです。

周防「おつ、確か補修する生徒がいるんだっけ。じゃあ俺は戻るわ。」

河村「あ、頑張ってくださいーい。」

周防「おう！張り切るわ！あ、張り切るじゃないか。頑張るか。」

こなた「…でねー。あれはこんな感じになってるんだ。」

麻衣「私の見てるアニメはすごくバトルアクションがすごいんだよ！」

なんか知らんけどこなたちゃんとは気が合っわ。今もこうしてアニメ話で盛り上がってるし。

智「私のは…あ…。」

麻衣「ちょ、智。鼻血垂れてる。」

智「あ、ごめん。」

こなた「おお…これはまさしく…百合系の「いつまで語ってんじやあー!」ぎゃん!」

?「全く…あんたの話にはついていけないわよ…。」

こなた「何かがみんなやきもちでも焼いてる?」

かがみん「焼いてないし、あとかがみんって言うな!」

?このツインの子誰かって?なんかこなたちゃんの友達でつかさちやんのお姉ちゃんのお母ちゃんがみちゃんって言うらしい。私から見るとツッコミ使いだな。

かがみ「誰がツッコミ使いよ!」

うお!読まれた!?

かがみ「こんなことしてる場合じゃないのよ！来週月曜日何かかわかってんの！？」

こなた「来週月曜日？何かあったわけ？」

麻衣「えーと…。」

智「アニメ『異世界の少女たち』ホワイイトプリンセス純白の女王』放送開始。」

こなた・麻衣「それだ！」

かがみ「違う違う。テストよ！テ・ス・ト！ちゃんと勉強してるの！？」

こなた「ちゃんとできてるよ。」

麻衣「私も。」

智「私も。」

かがみ「本当でしょうね…。」

3人「もちろん！」

かがみ「…ま、テストを返してもらったらわかることだしね。」

羅井野「あいつの弱点は…なるほどね…いいことを聞いたね…。」

怪しい器具を使って弱点を探っている羅井野。

羅井野「ふふふ…あいつの泣き叫ぶ姿を見るとゾクゾクする…。」

信童「よっしゃー！勝ったー！」

明久「あゝ！また負けたゝ！」

秀吉「すごい…短い時間であんなに積み上げて連鎖するとは…。」

雄二「はあ…全く歯がたたねえ…。」

姫路「強いですねゝ。」

島田「も、もう一回やらない？このままじゃなんだか気が済まなくて…。」

信童「いいぞ。」

逢坂「よし、絶対次は勝つぞー！」

高須「おいおい…むきになりすぎだろ…。」

信童「どれにする？」

明久「そうだな…これで。」

信童「これか？別にいいが…。」

逢坂「早くやるぞ！」

信童「はいはい。」

杉崎「なあ…俺もやらしてくれねえか？」

明久「いいよ。僕と変わる？」

杉崎「おっ、サンキュー。」

信童「よし、さっそく始めるぞ！」

10分後

プシュ…。

逢坂「…。」

信童「あれ？なんかチート並みに強いんですけど？」

秀吉「もう終わったぞ…。」

雄二「くっそー！」

姫路「所で杉崎君何回勝っているんですか？」

杉崎「これで…7回連続か？」

高須「どんだけ強いんだよ。7回連続で。」

島田「何かセコいことでもしてんじゃないの？」

杉崎「してないぞ？俺は吉井から渡されたゲーム機でしてるんだから。なあ？」

明久「あ、うん。」

杉崎「ほら。」

島田「くーっ！」

信童「さすが…ギャ「なんか言ったか？」いや、全然…。」

逢坂「全く…！」

バツ！

高須「？どうした？」

逢坂「いや、誰かがあそこから私たちを見ていたような気がして…。」

高須「気のせいじゃないか？」

逢坂「そ、そうかもな…。」

…ジ…。

？「僕のことを感じ取るなんて…危ない危ない…此処でばれたら僕の楽しみがなくなっちゃうからね…。さーて…一体誰と誰の友情引き裂こうかな…クスクス…。」

秋神「！」

ななこ「？どうかしたんか？」

秋神「いや、なんだか邪悪な気配がしたもんで…。」

ななこ「多分悪ふざけを考えてる連中やろ…ほつといた方がいいと思うで…。」

秋神「そうですか…。（いや、今の気配はこの学校の者の気配では無かった…じゃあ一体だれの…。）」

？「おっ？あれは…。」

アリア「キンジ！今から一緒に街のゲーセンに行かない？」

キンジ「別にいいが…何をするんだ？」

アリア「別になんでもいいでしょ！」

？「クスクス…まずはメモっと…僕の楽しみは夜が本番だからね…
それまで気をつけなくちゃ…」

南夜「？あの方は…誰でしょうか…？」

羅井野「…！？（まさかライバル！？情報を探るなんていい度胸じゃない…今度会ったら泣かしてやるわ…。）」

— ??? —

？「ふう…やっぱりこの中を通るのは気が引くなあ…」

？「目的地まで…近いんですか？」

？「いや、まだまだだな…」

ピリリリ…。

？「はい…ああ、局長ですか…今どこにいますかって？光星市の地下にある巨大地下水路です。はい、はい…目的地までまだまだ時間はかかります。…工場で見つけたあいつですか？元気ですよ。はい、はい…それじゃあまた…」

ピッ！

？「さて…早く行くか…。」

？「はい…。」

オリキャラ紹介

すおうしゅうのすけ
周防宗之介

年齢：27歳

誕生日：7月16日

性別：男

髪：少しぼさぼさになっていて灰色がかった青色

目：こげ茶色

性格：おおざっぱで適当

2年1組担当の国語の先生。言葉を間違えて間違った所を指摘した後正しい言葉に言い直すという変わった喋り方をする。酒にはかなり弱く1、2滴でも酔ってしまうほど。河村や影久とは仲がいい。ちなみに夢は錬金術を使えるようになる事。

謎の影（後書き）

久しぶりの登場の河村。

主人公なのに…。

ああ…やばいやばい…。

事件前日（前書き）

基本的にこの小説、ゲームしている場面が多い。

今回もまたやってる…。

事件前日

P M 8時30分

―河村の部屋―

河村「はあ…今日も楽しかったなあ…。」

影久「教室行った時信童君達気絶してたけどね。」

河村「あの時は焦ったね。」

影久「みんなを保健室まで運ぶのきつかった…。」

河村「うん、そうだね…。」

影久「…。」

河村「この学園に…ずっといたいな…。新しい友達ができ、仲のいい先生ができて、楽しい日が毎日過ぎて行つて…。」

影久「ずっと続いてほしいな…こんな日が…。」

河村「うん…。」

ピリリ！ピリリ！

河村「？電話だ…。」

影久「誰？」

河村「えっと…あ、麻衣ちゃんからだ。もしもし。」

麻衣？「…。」

河村「？何か辛いことでもあるの？何か言ってごらんよ。」

麻衣？「…さい…。」

河村「？よく聞こえなかった『うるさい…』え？」

麻衣？「あなた…調子に乗らないでよ…。」

河村「え、え、何のこと？」

麻衣？「もうあなたとは話さないから…それじゃあ。」

ピッ！

河村「え！？え！？切れちゃった…。」

影久「ど、どうした？」

河村「いや、なんだかいつもの麻衣ちゃんじゃなかった…。」

影久「…明日話せばいいんじゃない？」

河村「そ、そうだね…。」

―信童の部屋―

麻衣「頑張れ〜！」

智「ちょ、明久君！それじゃ信童君にも…あー、当たっちゃった…。」

只今私たち、Wiiのポケバトしています。

信童「おいしい！！明久！俺にも攻撃当たってるじゃんか！」

明久「あ、ごめん！」

こなた「ふっふっふ、仲間割れしているようだね？」

杉崎「そんなんじゃ俺たちには勝てないぜ？」

こなた「こんなコンボはどうか〜？」

信童「あ！まもる使ってきた！」

明久「集中攻撃ふさがれちゃったよ〜！」

こなた「そこに私のバンギラスがじしんとどめ！」

信童・明久「あゝ！」

杉崎・こなた「いえーい！」

明久「また負けちゃったゝ…。」

信童「攻撃だけ考えてコンボ考えてないや…。」

こなた「またまた作戦勝ち！」

信童「くっそゝ…。」

麻衣「あはは…？電話…亜由ちゃんからだ。もしもし。」

智「じゃあ次私と明久君ね。」

こなた「私たちのチームに勝てるかな？」

杉崎「かかってこい！」

麻衣「え？ちよつと！それどうゆうこと！？ちよつと！！」

智「…どうしたの？」

麻衣「いや、いきなり「もう友達やめるから、バイバイ…。」って
言っただけだよ！」

信童「聞き間違いじゃないか？」

麻衣「確かにそう言ったのよ！」

こなた「明日、教室で聞いてみれば？」

麻衣「…そうするわ…。」

智「お姉ちゃん…。」

麻衣「智…私先に自分の部屋に戻るから…。」

こなた「…。」

ボタン！

信童「…何があつたんだ？」

智「さあ…？」

アリア「ちょ、キンジ！それどうゆうこと！？待ちなさいよ！…キンジ…！」

つかさ「え、え、ちょっと…こなちゃん！待って、待って！」

唯「待つて！待つて！ちゃんとやるから！お願いだよ！そんなこと
言わないでよ！」

姫路「明久君？そんなこと言ったらどうなるかわかってますよね？
明久君？…電話切れましたか…。」

その後…河村と似たような仲に亀裂が入るような電話が生徒たちにか
かってきていた…。

？「クスクスクス…楽しいねえ…でも、まだまだ物足りないんだよ
…僕は…クスクスクス…。」

此処は地下水路。そこに二人の女性がいた。

？「…こっちは行き止まりか…。」

？「複雑ですね…この地下水路。」

？「まあいろんな所からの下水が流れていることだけあるな…。」

？「…？なんでしょう…足音がします…。」

片方の女の方が振り向くと体中が緑色をした不気味な魔物がいた。

「うがぁ…がぁ…。」

？「こいつ等がこの地下水路に住み着く魔物ってやつか…。厄介だな…。」

？「どうします？。」

？「んなもん決まってる！倒してやる！」

「うがぁぁ…！」

？「おりゃぁぁぁ…！」

？「はぁぁぁ…！」

次回、長編、「友情滅裂編」突入。

事件前日（後書き）

ちょっとこの作品のOP、ED考えてみました。

OP もってけ！セーラーふく

ED 風船ガム

長編とかない時はこの2つがOP、EDです。

あと、次回から始まる長編のOP、EDも考えています。

学園で暗躍する謎の影…一体どんな事件を起こすのか…。

―訂正―（9月27日）

話の最後あたりでの二人の男女の所を二人の女性と直しました。

銀髪の男性と友情滅裂編（前書き）

信童「作者、オリキャラがすごく多いが今どれだけストックあるんだ？」

作者「現在80人。」

信童「多っ！！！！！」

作者「その訳は後書きで話します。ではどうぞ！」

信童「無理やりだ！」

銀髪の男性と友情滅裂編

河村「…。」

昨日の電話の麻衣ちゃん…何かがおかしかった…なんだか麻衣ちゃんじゃなく、別の人が話していたような気がする…。

河村「…だとすると一体だれが…。」

アリア「キン〜ジ〜！」

キンジ「うわっ！なんだよアリア…。いきなり銃を構えて…。」

アリア「昨日のこと、忘れたとは言わせないわよ…！」

キンジ「ちょ、待て！何のことだよ…！」

アリア「うるさーい！その頭に風穴あけてやるー！」

キンジ「ちょ、待て！話を聞けえ…！」

河村「…？」

明久「島田さん？姫路さん？何で僕ぐるぐる巻きになっているの…？」

姫路「明久くん？昨日の電話わかってますよねえ？」

明久「昨日の電話？僕掛けてないよ！電話なんて…！」

島田「嘘付かない方が身のためよ？明久く！」

明久「うわああ！ちよつと待ってええええ！！！！！」

河村「…みんな何かあったのかな…？」

みんな昨日のことって言ってるけど…私と同じ目にあっているのかな…？

河村「でも身に覚えのない人もいるし…もしかしたら…。」

麻衣「あー！いたー！」

河村「あ、麻衣ちゃん…。」

麻衣「昨日の電話一体何よ！？何でいきなりあんなこと言ったのよ！？」

河村「え？私も麻衣ちゃんから電話かかってきたんだけど…。」

麻衣「電話？かけてないわよ！昨日はずっと友達とゲームで対戦していたんだから！」

河村「私も一回も掛けていないよ！」

麻衣「だったらあの電話は一体誰が掛けたって言うのよ！」

紫「あ、河村さん、西兎さん。」

麻衣「が、学園長…一体なんですか？」

紫「ちょっと話したいことがあるの。来てくれない？」

河村「え？あ、はい…。」

―学園長室―

河村「あ、秋神さん…。」

秋神「やあ。」

麻衣「それで学園長、話って…。」

紫「ええ、あなたたちも昨日不審な電話がかかってきたでしょう？」

河村「あ、はい。掛けてきました。」

紫「実はその不審な電話がこの学園にいる生徒の約半分ほどにかかってきたのよ。昨日の夜にね。」

麻衣「生徒の約半分…！？」

紫「しかもその内容がほとんどは「友達やめる」と言う内容なのよ。」

河村「（昨日かかってきた電話の内容とほぼ同じ…。）」「

紫「そして、この学園内で数日前から怪しい人影が目撃されているのよ。目撃者によるとその人影は生徒をじろじろと見ていたって話だわ。」

麻衣「ってことは…。」

紫「今回の出来事はその怪しい人影によるものと考えていいわ。」

麻衣「でも、一体どうすればいいんですか？その人影どこにいるか分かんないんでしょ？しかもその人影がやったと言いついて切れないし…。」

紫「だからね、ある場所に行ってその人たちに協力してもらうのよ。」

河村「ある場所…ですか？」

紫「行くのは放課後でいいわ。案内は周防先生に任せるから…。」

秋神「それと、君たちだけで行くのは危ないから、あと何人かも一緒に行かせるんだって。」

麻衣「はあ…。」

紫「じゃあ、よろしくね。」

麻衣「あ、はい。」

河村「分かりました…。」

―放課後 校門前―

周防「みんなそろった？じゃあ向かうよー！あ、向かうよー！じゃないか。行くよー！か。」

集まったのは私と愛ちゃん、信童君に麻衣ちゃんと智ちゃん、そして、羅井野ちゃんと、南夜ちゃんです。秋神さんは「別の用事があるから行けないんだ。ごめんね。」と言っていました。

羅井野「早く行きましょう先生。」

周防「気が短いな〜じゃあ行くか〜。」

―江戸ノ町 とある場所―

周防「すいませーん。誰かいますか〜？」

まず最初にやってきたのは古い建物の二階です。下に何かお店をやっていたが何かはよくわかりませんでした。

と、思っていると…。

ガラ…。

髪は銀髪でやる気のなさそうな男性が出てきました。

？「はいはい、誰ですか？話なら中で聞かせてください。」

銀髪の男性く友情滅裂編く（後書き）

前書きでも書いた何でオリキャラが多いか…。

実は此処で小説を書く前にオリキャラを書いていたんです。中2で理由はなんとなくオリキャラを作ってみたならそれにはまってしまい、気付いたら80人もいたってことになったんです。

ちなみに、一番最初に作ったオリキャラは秋神涼平です。二人目は秋神の妹です。

なので秋神は結構思い入れのあるキャラです。

でも自分とはまったく似ていません。（笑）

しかも、当初の設定とは大きく変えています。変えた理由は此処の小説で出すにあたってこの設定は無い方が良いなと思ったからです。（当初はホムンクルスと言う設定がありました。）ちなみに河村達が秋神のことをさん付けで呼んでいるのはこの設定の名残です。

では此処で、自分が作ったオリキャラのうちの一人を紹介します。

そのうちこの小説でも出るかも。

秋神の妹です。

あきかみ
秋神 涼

年齢：13歳

誕生日：????

性別：女

髪：????

目：????

性格：????

詳しいことは登場してから。

親友ゝ友情滅裂編ゝ（前書き）

更新頑張ってます。

いろいろ考えてます。

でもやっぱり短い。

親友く友情滅裂編く

？「用件は何ですか？こっちもいろいろと忙しいんですよ。早く言ってください。」

信童「（うわあやる気ね…。）」

現在私たちは案内されて部屋の中にいます。で、目の前にはやる気のない銀髪の男性がいます。

周防「あなたが坂田銀時さんでいらっしやいますか？」

銀時「あゝそうだけど？」

周防「実はうちの学園で生徒にいたずら電話をかけて迷惑をかけると言ったことが起こっておりまして…そして学園内に怪しい人影が目撃されておりまして…。」

銀時「つまり何か？その人影が怪しいとにらんでるわけでその人影が何か調べてほしいってわけか？」

周防「あーそーゆーことです。」

いきなり適当になりましたね、先生。

銀時「あーこちらねーいろいろ忙しいんであとにしてもらえまず？で、後その黙りこんでる子何？怖いの？ちゃんと喋ってくんない？」

南夜「ええと…南夜神楽と言います。400年間ぐらいつと幽霊
しています…」

ガサッ

…。

周防「…何しているんですか？」

銀時「て人、ゴミ箱に顔突っ込んでますね…」。

銀時「おいお前、幽霊って言うな、絶対幽霊って言うな！」

南夜「え、じゃあ何てい「スタンドって言え！スタンドって！」え、
でもすた「スタンドでいいんだ！」あ、ハイ…」。

周防「幽霊怖いんですか？」

銀時「こ、怖くねーよ…全然怖くないからね、銀さん全然怖くない
からね！」

周防「そうですか…。じゃあ依頼の方ですが…」

銀時「あーそれねー…別の所でやってくんない？」

？「銀さんいいんじゃないですか？今依頼一件もないんだし。」

銀時「何だよ新八。こんないい加減なやつ依頼受けろってのか？」

新八「そうゆうわけじゃないんですよ。今依頼一件もないんですよ？　そんなに食っていけると思いますか？　だから一つでも多く受けておきましょうよ。」

銀時「そうは言ってもさあ…。」

周防「これでどうです？　最近私の家の近くでパフェ専門店が開いたんですよ。そこのい「よーしわかった。じゃあ受けてやるか。」

軽いよ。この人。

周防「じゃあよろしく頼みますね。」

銀時「その代わり、分かってるだろうな？」

周防「ええ。」

南夜「（此処万事屋銀ちゃんって言うんだ…。）」

周防「じゃあ次は此処から結構先にある森の中の神社だ。」

信童「神社？（あ、そう言えば明久が言ってたな…。）」

周防「今から行くぞー。そこのやつにもお世話になるからな。あ、お世話になるじゃないか。頼まないとか。」

―博麗神社―

私たちは神社にやってきました。

周防「あのーすいませーん。誰かいませんかー？」

？「何？あんたたち…私に何か用？」

神社から出て来たのは茶色の髪をした巫女さんっぽい格好をした女の人でした。

周防「名前は…。」

？「博麗霊夢よ。で、用件は？」

周防「私が（以下略）」

霊夢「ふうん…で、私に調べてほしいと？」

周防「ま、これで勘弁して下さい。」

霊夢「…まあいいわ。調べてあげる。」

周防「ありがとうございます。」

霊夢「で、いつ行けばいいの？」

周防「今夜の9時、此处でどうですか？」

霊夢「…いいわ。じゃあよろしくね。」

周防「よろしく。」

周防「じゃあ、解散！」

生徒「解散って投げやりだ！」

周防「じゃあ俺先帰ってるから…じゃあ…」

生徒「…。」

影久「やっぱり適当…。」

河村「あはは…。」

？「あー！いたー！」

信童「え、この声って…げふ！」

榊城「偶然だね…こんな所で会うなんて…」

羅井野「…あなたたち…何でこんな所に…。」

？「それはだな…私が説明しよう…。」

麻衣「ってかその前にあなたたち誰？」

柊「申し遅れた。私の名前は柊皐月。」

榊城「私は榊城灯だよ。」

水無月「水無月胡桃。」

麻衣「で、信童君や羅井野ちゃんとは一体どういった関係？」

柊「そのことはだな…私たち3人が倒れている所をその二人に助けてもらってな。で、その恩返しにと信童の部屋に居候させてもらっているいろいろお手伝いをしている。」

智「リア充だね。」

信童「で、何でこんな所にいるんだ？」

柊「3人でいろいろな場所を探索しようってことになってな、歩いていたらお前らを見つけたってわけだ。」

信童「ふ〜ん…。」

麻衣「で、穂月…何で隠してたの？」

信童「いや、言ったらなんかおかしく思われると思って…。」

麻衣「言わん方がおかしく思われるやろがー!!」

信童「ああああ……！回し蹴りー！？」

智「おお！ギリギリよけた！」

影久「じゃあ今夜集合ね！」

信童「あ、ああ……。帰るぞ……。」

榊城「はい。」

麻衣「つたく……じゃあ私たちはそのあたりの本屋でも見てくるから……。」

智「ばいばーい！」

羅井野「……さて私は帰って出品するものを完成させないとね……。」

南夜「私はちよつと探索してみます……。」

河村「……私たちも帰ろう。」

影久「……うん。」

影久「……ねえ亜由……。」

河村「何愛ちゃん？」

影久「…これからも、親友でいてくれる？」

河村「当たり前だよ。そんなの。」

影久「…だよな。」

河村「…うん。」

？「あいつはあいつの声でやった方がよかったな…まあまだチャンスはあるからな…。クスクス…」

？「…やっと会えましたか…。」

？「この人が…。」

？「ちょっと迷いすぎたかな？」

？「…すみません…。」

？「…いいっていいって。」

？「それで用件は何ですか？

秋神涼平局長……。」

接触〜友情滅裂編〜（前書き）

今回はついに謎の人物の名前が明らかになります。

接触〜友情滅裂編〜

その日、私達は協力してくれる人を探して、その日の夜に指定した場所に集まるように言いました。

その夜…。

銀時「えーみんな集まったかー？これより俺たちはー怪しいやつ」
声がかすぎじゃあああああああ！！！！！！」ぎゃ
あああ！！！！！」

何でこの銀髪の人が仕切っているんでしょうか…。あと声がかすぎ
！！ばれたらどうするんですか！？

あ、今ツッコんだのは博麗霊夢さんの知り合いらしくて霧雨魔理沙
さんって言うらしいです。

霊夢「魔理沙ー。声がかすぎよー。もうちょっと静かにしなさい。」

魔理沙「だってよ。」

銀時「だってよ、じゃねーよ！！何お前頭に箒フルスイングしてん
の！？俺の頭ホームランしたらどーすんの！？」

魔理沙「ホームランは見事だから別にいいぜ。」

銀時「こっちはよくない！」

新八「ちよつと銀さん、魔理沙さん、静かにしましょうよ。もしこ
れ犯人に聞かれていたらどうするんですか？」

銀時・魔理沙「黙ってるメガネ。」

新八「誰がメガネじゃこらあああああ！！！！！！！」

銀時「じゃあこの中にはいるか。」

魔理沙「そうだな。」

新八「無視するなあ ああああ！！！！」

個性ぶちまけすぎ。。

周防「えー皆さん。犯人を見つけるのに、これだけ大勢で行動していたら見つかる可能性があります。と言うわけで何グループかに分けて行動しましょう。」

と、言うわけでチーム分けしました。チーム分けは以下の通りです。

Aチーム 河村亜由 西兔麻衣 西兔智 坂田銀時

Bチーム 信童穂月 志村新八 博麗霊夢

Cチーム 影久愛 神楽 霧雨魔理沙

Dチーム 羅井野美宇 南夜神楽 周防宗之介

周防「じゃあ行きましょうか。」

私たちは今、自分たちの教室に向かっています。

銀時「いやーそれにしても広いなここはー。」

河村「私たちも最初迷子になりましたからねー。」

銀時「あーなんとなくわかるわ。」 もぐもぐ

智「…ところで何食っているの?」

銀時「あんパンと牛乳に決まってるんだろ。」

麻衣「…何だよ。」

銀時「張り込みって言ったらやっぱこれだろ?定番だろ?」

麻衣「誰が刑事みたいに張り込みなんてすると思って…。」

銀時「おい、怪しい奴はいるか？」

智「いません。」

銀時「そうか…ほらよ。」

智「済まない。」

麻衣「って何やってんのあんたら！！ふざけに来てんじゃないのよ！あと何で刑事服になってんのよ！あと智！このオジサンのやつてることに乗らない！！」

智「えへへ…ちょっとおもしろそうだったから。」

銀時「あとお前、オジサンって言ったな？お兄さんと言いなさい！じゃないと八つ裂きにすんぞ！！」

麻衣「はいはい、分かったわよ老けたお兄さん。」

銀時「一言多い！！！」

河村「あの…みんな…少し静かにしないと…。」

智「誰かいるよ…。」

銀時・麻衣「何！？」

こそこそ…。

私たちが見たのは廊下で棒立ちしている人影でした。もしかしたらあの人が犯人なのかも…。

銀時「（何あいつ！？お前らの知り合い！？）ヒソヒソ」

麻衣「（いや、全然見たこと無い人だわ。）ヒソヒソ」

智「（怪しい人だね…。）ヒソヒソ」

河村「…。」

？「…ねえ、そこで隠れて何してるの？」

智「…！」

麻衣「気づいてた！？」

その男性は黒と赤を基調とした服に身を包み、黄緑色の髪をしていました…。

銀時「気付かれてたか…。お前は一体誰だ？」

？「僕の事かい？僕は声や姿を本人のままに変身できるから変幻自在って言われているよ。」

銀時「そうかよ…で、お前は此处で何をしているんだ？」

変幻「いやあ、何、ちょっと遊んでいただけだよ。」

麻衣「遊んでいた…？」

変幻「そう、人と人の友情や絆を引き裂く遊びだよ。」

銀時「！！」

麻衣「引き裂く…友情を…？」

変幻「そうさ。人間ってね自分が一番大切に思っている人に裏切られるとね、絶望を感じるんだよね。僕はそんな人の姿を見るのがとても面白くてね、ついついはまってしまったよ。」

銀時「おい…お前が何したかわかっているんだろうな…？」

変幻「何をしたかって？そんなの決まってるじゃないか。遊びにき「分かってねえな…。」何だと？」

銀時「友情や絆ってのは生きていくうえで絶対に無くしてはいけなものだ。人は一人じゃ生きられない。人は何人もの人と支えあって初めて生きていけるんだ。それをつなぐのが友情や絆ってもんだ。お前はそれを壊してきた…どうなるか分かっているんだろうな？」

変幻「ふうん…僕の遊ぶ邪魔をするんだね…邪魔するやつは許さないよ？」

銀時「邪魔？邪魔なんかしねえよ…お前の悪ふざけを、止めるだけだ。」

変幻「じゃあ久しぶりに…殺っちゃおうか！」

銀時「はあああああ！……！！！」

霊夢「！！」

新八「どうしたんですか？霊夢さん？」

霊夢「…嫌な予感がする…早く行くわよ！！」

新八「うわああちよつと！！」

信童「おい待て！！」

？「…着いた…。」

？「此処に…あいつらの仲間が…。」

？「ああ、一刻も早く止めるぞ。じゃないと…世界が…。」

？「ええ…。」

？「破壊される…。」

接触、友情滅裂編、（後書き）

次回、激闘！！

V S 変幻自在／友情滅裂編／（前書き）

？「おーい…俺の出番は一体いつ何だ…？」

作者「出しますから落ち着いてくださいって。」

？「落ち着けるか…！」

作者「今回か次かいつか出しますから。」

？「いつかっていつじゃあああああ…！…！…！…！」

作者「ぎゃあああああああ…！…！…！…！…！」

？「はあ…はあ…私たちの…学園生活日常…どうぞ…。」

VS 変幻自在／友情滅裂編／

銀時「はあああああ！！！！！！」

変幻「おおつと。」

すごいです…あの銀髪の方…先ほどまでとの人とは全く違うような
雰囲気です。

銀時「おりゃああああ！！！！」

変幻「うわっ！！」

銀時「はああああ！！！！！！」

変幻「むう…少しはやるようだねえ…でも…。」

ガシッ！！

銀時「！！」

変幻「僕には及ばないんだよ！！」

河村「あっ！！」

ガッ!!

変幻「…へ？」

銀時「やっと動きが止まったか…はあああ!!!!」

ドゴッ!!

変幻「ぐはっ!!」

智「す…すごい…。」

変幻「ぐう…ちょっと油断したようだけど…今度はそうはいかないよ…はあ!!」

変幻自在は立ちあがったあと右手の人差し指を突き出し、そこから赤いビームを発射した。

銀時「!!…うわっと!!」

麻衣「キャア!!」

ブワン!

ビームが廊下に当たると煙が大量に発生し、視界が悪くなった。

銀時「これは…煙幕か？」

智「何も見えない…。」

麻衣「みんな！手をつないで！」

河村「あ、うん！」

智「わかった！」

銀時「仕方ねえな…。」

煙が晴れてくると変幻自在の姿は無かった。

代わりに信童や霊夢と一緒に行動していたはずの新八の姿があった。

銀時「し、新八！？お前なんで此处に…。」

新八「いや、この近くを搜索していたら何やら物音がしたんで…気になってここに来たら煙が充満していて…そして晴れたら銀時達が出て…何かあったんですか？」

河村「あの、犯人見つけたんだけど…逃げられたみたいで…。」

銀時「（待てよ…今、新八、俺のこと銀時って言ったな…。いつもは銀さんって言うているのに…まさか…。）！！おい河村、そいつに近づくんじゃねえ！」

河村「え？」

新八？「あーあ、ばれちゃったか…。」

ひゅん

銀時が叫ぶと河村の目の前にいた新八はいきなり姿を変え、変幻自在に変わった。

河村「え！？」

変幻「ちよつと此処から外を覗いて君たちの仲間に化けて攻撃しようと思っただけど…どうやらばれてしまったみたいだね。でも遅いよ？」

ブンッ！

変幻自在は河村に向かって横蹴りをしようとした。

河村「ひっ…。」

銀時「あぶねえ！！」

ゴッ！

銀時「ぐは…。」

河村「…！銀時さん！」

銀時は河村をかばい、変幻自在の横蹴りを自分が受けた。

変幻「あれ…？おかしいな…？目の前にいる女の子を蹴ったつもり

なんだけどな〜？まあいいや。僕の邪魔をするやつは殺されて当たり前だからね。おりゃあ！！」

変幻自在は銀時をおもいつき蹴り飛ばした。

銀時「がは…。」

麻衣「ぎ、銀時さん！」

智「銀髪のお兄ちゃん！」

西兎姉妹が銀時に駆け寄ろうとした。

変幻「あの人には近づかせないよ〜？」

ボカツ！

智「キヤア！」

麻衣「グ…。」

変幻自在は二人を殴り飛ばした。

変幻「さあて…よくも僕の邪魔をしてくれたね？ただじゃ済まないからね…。」

変幻自在は右手に力をため、炎の玉を作りだした。

変幻「あつちの銀髪をいきなり殺すつてのもなあ…結構痛めがいいがあるし…お楽しみとしてはぴったりだから…そうだ！まずはこっち

のピンク色の二人から殺しちゃおう!!」

河村「や、やめて…。」

変幻「いっくよー!」

麻衣「う…。」

智「うう…。」

銀時「て、テメエ…。」

河村「やめてえー!!!!」

変幻「いっけえー!!!!!!」

変幻自在は西兎姉妹に向かって炎の玉を投げつける!

?「『静寂の鼓動』!!」

ドカアアアアアン!!!!!!!!!!

河村「!?!」

いきなり窓から青色の光線が変幻の放った炎の玉にぶつかり、相殺した。

銀時「い、一体何だ…？」

変幻「何だ…！？一体誰だよ！？邪魔するやつは！？」

？「ふう…やつと間に合ったな…。サンキューなドンカラス！」

煙が晴れると髪の色が黒と白の2色に分かれていて、目は銀と金のオッドアイのハルヒ似のひと、金髪で片目は眼帯をしている少女が巨大なカラスと一緒にいた。

？「おい teme エ！俺の友に手を出すとはいい度胸じゃねえか！この俺が teme エをコテンパンにしてやるぜ！」

河村「そ、その声って…。」

？「いよーう河村、やつと着いたぜ！」

河村「す、スバルさん！？」

銀時「スバル…？」

河村「あ、はい。涼平さんが中心となって組んでいる狂撃隊の副隊長で転生者です！」

銀時「ふーん…転生者か…って転生者！？」

スバル「そうだぜ。まあ、転生前は男だったんだけどな。」

河村「…で、隣にいるスバルさんに隠れている子は？」

スバル「ああこいつか？こいつは…。」

？「三日月^{みかづき}魔^ま香^かです…。よろしくお願いします…。」

河村「あ、ハイ…。」

と、話しているとBチームがやってきた。

霊夢「はあ…はあ…！大丈夫！？」

麻衣「え、ええ…。」

智「金銀のスバルさんがやってきたから大丈夫だよ。」

霊夢「スバル…？」

スバル「俺だ俺！」

霊夢「あなたがスバル…。」

スバル「おう！よろしくな！」

変幻「…今のうちに…。」

スバル「おおっと！逃がしやしないぜ？」

変幻「げっ!?!」

スバル「俺の友にけがを負わせた罪は大きいからなあああ!?!」
雷電の怒り『!?!』

ドガアアア!?!?!

変幻「うわあああ!?!?!」

変幻自在はスバルの攻撃をもろにくらってしまった。

変幻「うぐ…あれ…体が…。」

スバル「雷電の怒りを食らったやつは一定時間体がしびれて動けなくなるんだぜ!おい銀髪!」

銀時「…俺か?」

スバル「借りは返さねえのか?今ならとどめをくらわせることができるぜ?」

銀時「ふん…好きにやるがいいさ…。」

スバル「あっそ。じゃあ終わらせるとしますか!」

変幻「ひっ!」

スバル「おらああああ!?!?!?!」

ドガアアアアアン!!!!!!!!!!

変幻「ぎゃああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

影久「!?!?何の音!?!」

魔理沙「行ってみるぞ!」

羅井野「…爆発音?」

南夜「何かあったのかも知れません。行ってみましょう!」

?「おい、テメエら。その場所に俺らも連れて行ってくれねえか?」

羅井野「あなたたちは…。」

影久「ねえねえ、何の音!?!」

河村「あ、愛ちゃん!いまスバルさんが犯人をやっつけてくれたんだよ!」

スバル「よっ、久しぶり!」

影久「スバルの姉ちゃん！」

スバル「だから姉ちゃんじゃなくて兄ちゃんだろ！！ってかお前の姉でも兄でもねえし！！」

影久「で、亜由。犯人は？」

河村「そこ。」

変幻「ピク…ピク…。」

影久「へえーこの人がかあ…。」

と、犯人を眺めていると二人の男性がやってきた。

？「あいつがそうですかい。」

？「お前が犯人か…ちよつと署で話を聞かせてもらおうか。」

河村「？あなたたちは…。」

？「俺は土方十四朗だ。お前らの知り合いの秋神ってやつから頼まれて此処に来たんだ。事件の内容はあいつから聞いてるから後はこいつを署に送って話を聞くだけだ。」

？「俺は沖田総悟ですぜい。土方さんが少しうぜえことを喋ったのでこれを。」

そう言うと、沖田は土方にカッターナイフを手渡した。

羅井野「ふうん…。」

土方「何してんだ沖田。行くぞ。」

沖田「へいへーい。」

そして、二人はパトカーに乗ったあと、帰って行った。

影久「…ふう、一件落着つてやつ?」

周防「そうですね…皆さん本日はよく頑張りました!この学校のために頑張ってくれて先生はとても感動です!あ、感動じゃないか。感激か。」

影久「先生また〜。」

みんな「あははははははは!…!…!…!」

—???—

?「変幻自在のやつは使い物にならなかったか…。」

?「そのようです。」

？「ふつ、…まだ時間はある…。次の作戦の準備をしておけ。」

？「はい、かしこまりました。」

？「ふふふ…覚悟しておけよ…。」

―？？？―

涼平「なんとか一人目はスバルが片づけてくれたか…。」

？「でも、あいつらの計画わかっているんですか？」

涼平「いや、計画は少ししかな。」

？「内容はどうなっているのよ？」

涼平「内容か？…内容はな…」

“ 光星市全域を支配、そして我が軍の配下に

おさめる”

これだけのこととあと少しかな…。」

？「支配ね…アホなことを考えるやからがいるものね…。」

涼平「やつらも下手にこちらに手は出さないはず。油断はするなよ。
らいもんじ 雷文寺 しいな 椎名、とこね 轟濤。他のやつらにも伝えておけ。」

椎名・濤「はい。」

オリキャラ紹介

スバル・アキラ

年齢：転生者のため詳しくは不明

誕生日：転生前だと7月9日

性別：転生前は男 転生後は女

髪：左は白色 右は黒色

目：左目は金色 右目は銀色のオッドアイ

性格：大ざっぱで面倒くさがり

狂撃隊副隊長の転生者。顔つきは涼宮ハルヒそっくりで服装は常に真撰組のを着ている。たまに他人任せになる。転生前のことは男だった以外あまりよく覚えてない。運動神経や頭はいい。アニメ、ゲームが大好きで、週に一度はいろいろなショップに行く。魔力がかなり大きく、普段は涼平にリミッターをかけられている。

みかつき まか
三日月魔香

年齢：人造生命体のため不明

誕生日：不明

性別：女

髪：金髪

目：左目は緑色 右目は魔眼のため赤色

性格：おとなしくて恥ずかしがりや

スバルが調査に行った先で見つけた人造生命体。はずかしがりやなため人がたくさんいるところではスバルの影に隠れている。スバルになついている。右目は魔眼でこの目とあつた人は三日月に操られてしまう。そのため普段は常に眼帯をしている。運動はかなりできる方。ちなみにかなりの世間知らず。スバルによると過去に実在した人物がモデルとなっているらしい。

VS変幻自在／友情滅裂編（後書き）

スバル「やっと俺の出番が来たか…。」

魔香「私もやっと出れました。」

椎名「私も…。」

漣「ってかあなたと私は今回が初登場じゃないの？」

椎名「あ、本当だ。」

スバル「それと、今回で友情滅裂編は終了だっさ。」

椎名「次回から普通の生活に戻ります。」

魔香「みなさんよろしくです！」

初対面の人と会う時はまず挨拶から（前書き）

スバル「なあ作者。」

作者「ん？何？」

スバル「今回の話、どこかで見たことがあるんだが…。」

作者「あー銀魂でしたからね。」

スバル「えーーーー。」

作者「じゃあどう「パクんなあああ……！！！！！！！！」あああああああ……！！！！！！！！」

信童「？なんか赤いもんが顔に……って作者あああああ……！！！！！！！！」

スバル「あ、言い忘れたけど友情滅裂編のOPは『裏切りの夕焼け』でEDは『サムライハート』で頼む。」

信童「遅いよ……！！」

初対面の人と会う時はまず挨拶から

―狂撃隊 屯所―

椎名「…で、今回の事件はやっぱりあれが絡んでいると?」

漣「そのようね。警察から聞いたけどあの変幻自在ってやつ、どこかの組織に雇われていたらしいのよ。」

椎名「ふーん…。」

漣「まあ今回のことも気になるけど一番気になるのは…。」

椎名「変幻自在とやりあった銀髪の男性のこと?」

漣「ええ。調べたところあの銀髪、この世界で起こった戦争に参加して生き残った人の内の一人らしいのよ。」

椎名「ええと…確か未確認生物がこの星を狙って侵略しようとした際に反抗した人たちがこの光星市とは違う場所で未確認生物と戦ってたくさん戦死者が出たって言うあの戦争の?」

漣「ええ。あいつについては何か調べておく必要があるそうね。雷文寺、調べてくれない?」

椎名「いいけど…もしあいつが危険人物だったら?」

漣「そんなの決まっているでしょ?」

殺りなさい。」

椎名「…。」

澪「って言うのが上の命令だけだね…私としてはそんな強そうな人とは一度でもいいから手を混じわえてみたいものなのよね…。」

椎名「はあ…殺るって…できるわけないだろう…轟先輩…いつつも自分の都合が悪くなると人に押し付けるんだから…あのドS巫女は…でもあの銀髪の人、気になるっちゃ気になるな…一応調べておくか…。ええと…まずはあの人と交友関係がある人から聞いていこうか…。」

――博麗神社近くの林――

椎名「ええと…確かこのあたりの林にあの事件の時一緒に行動していた人がいるって聞いたんだけど…あの人かな？」

そこにいたのは木に蜜っぱい物を塗る水色の髪の青年がいた。

椎名「あ、ちよつと君。」

？「…？僕？」

椎名「そうなんだけど…坂田銀時って人知らない？」

？「知らない。」

椎名「え。」

？「なんか光に包まれて気付いたら此処にいた。」

椎名「此処って君どこから来たの？」

？「プリンプタウンってところ。」

椎名「え…聞いたこと無いな？左手と左目なんか赤いし…で、友達とかいないの？」

？「いる。けどはぐれた。」

椎名「え…。」

？「でも気にしてない。此処は珍しい虫がたくさんいるから。」

椎名「ちょ、この人…虫以外のことに關してはざっくりしすぎなんですけど…。」

？「お、あっちにものすごくすごそうな虫がいる。待て。」

椎名「ちょ、君！…行っちゃった…！この階段の先かな？でもあの子誰だろう…。」

そのころ、先ほどの青年は…。

？「おお…ものすごくカッコイイ虫だ…。」

虫を捕まえていた。

―博麗神社―

椎名「確か此処だな…すいませ…ん…。」

霊夢「？何あなた？」

椎名「あ、ちょっと聞きたいことがあるんですけど…。」

霊夢「え？何？テレビ？雑誌？」

椎名「いや、違いますが…。」

霊夢「え…じゃあ何なのよ…。」

椎名「坂田銀時って人を調べていまして…あなた確かその人と交流があるって聞きました…。」

霊夢「あ…あの銀髪ね…。」

椎名「あの人の第一印象は一体どんな感じですか？」

霊夢「そんなの決まっているじゃない。やる気のない人そのものって感じ。」

椎名「やる気のない人ね…。」

霊夢「でも…。」

椎名「？」

霊夢「確かにあの人はやる気が感じられないけれどあの目の奥には何か光るものを感じたわ。白い光でいろいろな物を引き寄せるような…そんな感じの光だわ。」

椎名「ふ〜んそうですか…じゃあありがとうございました〜。」

霊夢「…一体なんだったのかしら…。」

椎名「え〜と次は…あの人かな？すいませ〜ん…。」

？「ええと…なんですか？」

椎名「いやちよつと坂田銀時って人について調べていまして…。」

？「坂田銀時…知らないですね…。」

椎名「そうですか…すいませんでした〜。」

？「…何だったのかな？」

椎名「えつと次は…。」

その後もいろんな人に取材しましたが…。

椎名「一人としてまともな人がいねえーーーー！！！！！！」

ぜんっぜんまともな人がませんでした。

椎名「しかしこの坂田銀時って人…調べれば調べるほど不思議な人だな…よし、明日、この人が働いているって言う所に行ってみるか…。」

―次の日―

椎名「なんか朝っぱらからあわただしかったから夕方になっちゃったけど…まあいいや。あのすいませーん…。」

シーン…。

椎名「？留守かな？あのー。」

シーン…。

椎名「？鍵が開いている…？あのー誰かいないんですかー？」

シーン…。

椎名「勝手には行っちゃいますよー。」

その後、私はいろいろな部屋を調べましたが…いませんでした。

椎名「この部屋が最後だ…ここかつ！」

ガラッ！！

シーン…。

椎名「いないか…はあ…どこに行ったんだろうな…。」

？「オマエココデナニシテイル？」

椎名「うわっ！！！」

私が声をした方向に向いてみると、頭に猫の耳のようなものが付いている…おばさんでした。

椎名「…。」

いや待て待て待て待て！！！！キモいキモいキモいキモいキモい！！！！！！！！何この人！？まったくもって萌え要素が無いんだけ

どー！皆無に等しいんだけどー！ってか絶対にないよー！！…あ、吐き気がしてきた…。

？「オマエ、ワタシトオナジニオイガスルネ。ドロボウカ？」

椎名「言っちゃったよ！この人自分で泥棒って言っちゃったよー！」

？「シツレイナ！モトロボウダヨー！ダイタイオマエ、ナマイキナンドヨー！ヒトヲニクトラシイメデミルンジャナイヨー！」

椎名「何それ逆切れ！？」

？「どうしたんだいキャサリン。」

キャサリン「ア、オトセサン。」

椎名「あ、あのすいません。此処にいる銀時って人はいますか？」

お登勢「銀時の野郎かい？あいつなら確か新八の家で治療しているって話だよ。」

椎名「そうですか…ありがとうございました。」

椎名「あ…最悪な物を見たな…しかし治療中か…無理に話しても多分聞いてくれないだろうなあ…。直った時にするか。」

―次の日―

漣「雷文寺から報告書が届いたわ…ええっと何なに…」

『報告書

あの坂田銀時って人はみんなの笑顔の為に頑張ったんだと思いました。

雷文寺椎名』

漣「…作文!？」

轟は報告書を思いっきり机にたたきつけた。

オリキャラ紹介

らいもんじ しいな
雷文寺椎名

年齢：15歳

誕生日：3月21日

性別：女

髪：金髪のロングでクセ毛が多数あり

目：左目が灰色で右目が青色のオッドアイ

性格：真面目

狂撃隊所属のオッドアイの少女。運動神経が抜群にいい。電気を扱った技を使える。

轟 零 とくろ

年齢：15歳

誕生日：5月1日

性別：女

髪：黒色のロング

目：紅色

性格：強気でサディスト

狂撃隊所属の巫女の少女。ドSでかつ、毒舌で戦闘狂と言う性格。式神を呼び出せる。

初対面の人と会う時はまず挨拶から（後書き）

スバル「銀魂一色！」

漣「バカだからね、作者は……。」

ダークマター（卵かゆ）と最終兵器はほぼ同じ（前書き）

漣「落書きバカが出ます。」

椎名「ほんとにあの能天気には悩まされますよね…。」

？「みんなー私だよー」

漣・椎名「（ウゼエ…。」

ダークマター（卵かゆ）と最終兵器はほぼ同じ

―志村家―

椎名「…はあ…。」

現在私は新八さんの家の中にいます。

何故かと言うと…。

漣「何あんた！？何あの報告書！？」

椎名「いや、銀時さんに会えなかったから…。」

漣「んなもん聞きに行けばいいでしょ！！」

椎名「でも今治療中だし…。」

漣「聞くぐらいだから大丈夫でしょ！！」

椎名「えゝ…。」

漣「分かったわよ！私と落書きバカも行くから！！」

椎名「なぜあいつも!？」

と、言うことで…。

椎名「来ちゃったよ…。」

この2人も来ました。

漣「へ…噂通り大きい家ね…。」

？「お…白い壁…。」

この落書きしか頭がないバカは初音涼萌。はつねりほ常に大きい筆を背負って
いる奴です。

漣「じゃあ、乗り込むわよ!」

涼萌「おー!!」

先が思いやられる…。

―床下―

漣「ついに来たわね…。」

椎名「静かにしてよ…聞かれたら終わりなんだから…。」

涼萌「ラジャー ミ」

椎名「殺したるか。あと器用に「ミ」を使いこなすな！」

漣「！話が聞こえて来たわよ…。」

椎名「えっ…ほんと？」

河村「銀時さん大丈夫ですか？」

銀時「おー大丈夫だー。見舞いありがとうな。」

河村「あ、はい。」

銀時「神楽ー。なんか読んでくれないかー？」

神楽「分かったアル！」

そして読みだしたのは…。

神楽「（ピーーーーーー）。」「？やばい内容のものを読んでいます。」

河村「神楽ちゃん！？それ子供の読むものじゃないよ！？」

銀時「あー！もういい！！それ以上は子供は読んじゃダメだか「何しとんじゃあアアアアアアア！！！！！！！！」ギヤアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

ドスッ

3人「イギヤアアアアアア！！！！！！！！！！」

銀時「ギヤアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

ぷしゅゝ…。

銀時「あ…ああ…。」

？「銀さん？それ以上動くと、死にますよ？（殺しますよ？）」

この大がまを持っている女性は志村妙。新八の姉だ。

銀時「あのー僕病院行っていていいですか？なんか幻聴が聞こえるんだけど？殺すーって聞こえんだけど！？あー分かってるよ！もちろん僕が悪いからさー！」

妙「ダメですよー銀さん。ほんとにそれ以上動いたら殺しますからね。」

銀時「ほらー、また幻聴がー！！」

新八「銀さん幻聴じゃないですよー。」

椎名「はあ…はあ…死ぬかと思った…でも穴ができた。これで中の様子がうかがえる。」

妙「銀さん動けないですからねー私お手製の卵かゆを食べてもらいましょうかねー。」

銀時「これ、なんて拷問ですか…?」

神楽「あねごー、私にやらしてほしいアルー。」

妙「あらあら、神楽ちゃんてお母さんですねー。」

カツ

妙が神楽に卵かゆを入れたお椀を渡そうとした瞬間、お椀を落とすてしまった。

妙・神楽「あつ。」

そして、そのお椀は先ほどの穴へ…。

ドロッ

椎名「へ?」

「ええ。」

涼萌「あ……」

•
•
•
○

ドカアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!!!

[illegible]

「で、誰なんですかあなたたち？」

「いや、あの…ちよつと銀時さんに話を聞きたただけで…」

新八「じゃあ何で床下にいたんですか？」

椎名「いや、ばれないように聞いたら帰ろうと思って…。」

神楽「んなもんだメアルよ！ちゃんと聞きに来ないとダメアル！」

3人「はい。」

「!!」

―次の日―

涼平「えーと…活動報告は…」

報告

志村妙の卵かゆを食べると死に至る恐れがある。

雷文寺椎名 轟 初音涼萌

涼平「…何の!？」

オリキャラ紹介

初音^{はつね} 涼萌^{りほ}

年齢：22歳

誕生日：不明

性別：女

髪：茶髪のロングヘア

目：左目がオレンジ色で右目が茶色のオッドアイ

性格：能天気でマイペース

常に大きい筆を持っているオッドアイの女性。局長の涼平よりは年上。基本的なあだ名は「落書きバカ」。筆で書いた絵は実体化が可能。基本的にマイペースでよく「メンドー」と言っている。昔、家が火事にあつた際に一人だけ助かつて、途方を暮れて街を歩いていたら秋神に会い、今のような性格になった。筆は初音以外には扱えない。

ダークマター（卵かゆ）と最終兵器はほぼ同じ（後書き）

涼萌「酷い目に会った…。」

涼平「ご災難で…。」

カラオケ（前書き）

―学校 教室 放課後―

こなた「暇…あつ、そうだ！」

河村「どうしたの？」

こなた「皆でカラオケに行こう！」

言っておきますが、作者は一回もカラオケに行ったことがありません。

そこを分かって話を読んでください。

カラオケ

こなた「いえーい！さて何歌う？」

私たちは今、カラオケボックスにいます。

普通のカラオケボックスより広いね…。

河村「此処の個室広いね。」

ナギ「そうか？普通の大きさだぞ？」

そうなんだ…。

で、今いるメンバー。

河村亜由 影久愛 信童穂月 西兎麻衣 西兎智 羅井野美宇 吉
井明久 島田美波 姫路瑞希 木下秀吉 泉こなた 柊かがみ 柊
つかさ 高良みゆき 遠山キンジ 神崎・H・アリア 綾崎ハヤテ
三千院ナギ

です。

こなた「やっぱり最初は…これっしょ！」

で、選んだ曲が…。

『ハレ晴レユカイ』

かがみ「あんたまたそんな…。」

こなた「歌うよー!」

かがみ「話聞けい!」

♪

わぁ…歌うまいな…。

信童「無い…無い…好きな曲が無い…。」

信童君は歌を聞かずにずっと好きな曲を探しています。

羅井野「さぁ…此処からどうされたい? (黒笑)」

影久「その…足で私を踏みつけて下さい…。」

羅井野「ふうん…こうかしら?」

影久「あ…そこじゃ無く…もうちょっと…。」

羅井野「奴隷のくせにぐちぐちうるさいわねえ…。私にお仕置きされたいの? (黒笑)」

影久「お、お願いします…。」

愛ちゃんと羅井野ちゃんは部屋の端っこでなんかやっています。

麻衣「またSMプレイ的なものしてる…。」

智「本当だね。」

止めないんだ…。

信童「飲み物何する…。」

信童君は好きな曲が無かったようで諦めています。

麻衣「私…これね。」

智「私も。」

羅井野「私はコーラでお願いね。んでこの奴隷には何もなくていいわ。でしょ？」

影久「はい…いりません…。」

羅井野「さあ…此处からこの鎖を使ってしていくわよ。（黒笑）」

なんかどんどんヒートアップしていった…。

信童「お前らは何が良い？」

かがみ「これにして。」

キンジ「俺はこれだな。」

信童「え〜と…これ1つ…これ3つ…。んじゃ頼むか…。はあ…
メカもカットも天使の夢も無え…。」

メカ「カット…天使の夢…あれかな？」

こなた「…よしと、歌い終わっただ。さて…点数は…?」

『93点!』

こなた「よっしゃ〜!高得点!」

キンジ「で、次誰が歌う?」

美波「アリアちゃん行った方がいいんじゃない?」

アリア「え、ええ〜私?」

ハヤテ「お嬢さまはどうですか?」

ナギ「私か?」

明久「デュエットか…だったら…。」

『そばかす』

アリア「何で?」

明久「な、なんとなく…。」

ナギ「私はアニメの曲がよかったんだが…まあいいか。」

アリア「ま、歌うしかないわね…。」

♪

キンジ「なんだろう…同じ声の人が二人一緒に歌っているように聞こえる…。」

秀吉「わしもじゃ。」

美波「ウチもよ。」

あ、みんなそう聞こえるんだ…。(中の人一緒だからね…。)

で、アリアちゃんがすごいアニメ声…。

麻衣「…で、何で雄二君がいないの?」

明久「あ、雄二なら霧島さんと一緒にどこかへ行ったよ。」

秀吉「そうか…お気の毒にな…。」

明久「うん、そうだね…。」

な、何があったの…?

明久「まあ、楽しもうか！」

秀吉「うん、そうじゃの！」

…（・―・）

河村「…ところで信童君は何を探していたの？」

信童「あ、ああ…旋風ノ舞とか蒼の旋律とかなんだが…全くないんだ…。」

河村「そ、そうなんだ…。」

姫路「そうゆう曲があるんですね…。」

と、話していると…。

？「失礼しまーす。お飲み物持ってきましたー。」

あれ？この声って…。

新八「ウーロン茶の人は…ってすごいアニメ声だな…。」

河村「あ、新八さん！」

新八「あ、確か河村さんだっけ？」

キンジ「何だ？知り合いか？」

河村「あ、ちょっとしたね…。」

信童「ん？あ、よう！何してんだこんな所で。」

新八「ちよつとバイトしているんですよ。少しでもためないとして……。」

神楽「唐揚げ持ってきたアルよー。」

河村「あ、神楽ちゃん。」

神楽「おう、久しぶリアルな！カラオケ歌わせるアル！」

新八「ちよつと神楽ちゃん、僕たちバイト中でしょ？ダメだよ歌っちゃ。」

神楽「うるさいアル。メガネ。」

新八「なんだとコラァー！！」

？「おいお前ら。仕事に戻らんか。」

新八「す、すいません桂さん。」

河村「？誰？」

神楽「ツラあるよ。」

桂「ツラじゃない桂だ。」

新八「所でエリザベスさんはどうしたんですか？」

桂「ああ…エリザベスカ。今は留守をしているのだ。あ、自己紹介が遅れたな。俺の名前は桂小太郎。好物は蕎麦だ。」

え、何で好物を…？

麻衣「何で好物まで言うのよ。」

？「ちよつとあなたたち、仕事に戻ってくれないの？」

桂「ああ、すまない。」

？「おー人がいっぱいだー。」

河村「ねえ…この人たちは…。」

新八「えつと…新しいバイトさんだよ。」

？「？あなたたち、知り合いのですの？」

新八「あ、うん。ちよつとしたね。」

桂「自己紹介したらどうだ？清掃員よ。」

？・？「誰が清掃員だ！（ですの！）」「」

？「…ちよつと取りみだしてしまいましたけど、まあいいですわ。私の名前はウィッチ。」

？「ドラコケンタウロスだよ。よろしくね！」

河村「あ、うん、よろしく。」

ウィッチ「…っとこんなことしてられませんわ。早く仕事に戻らないと…。」

ドラコ「あ、待ってよー!」

桂「では、戻らせてもらう。」

新八「戻るよ神楽ちゃん。」

神楽「えー…。」

河村「バイバイ…ってアリアちゃん、どうしたの!？」

美波「あ、なんか声がアニメ声過ぎて点数が『34点!』って出たのよ。」

アリア「私が…34点だなんて…。」

ナギ「落ち込んでダメだぞ。」

ハヤテ「そうですね。元気出しましょう。」

ちなみに今は秀吉さんが『曇天』を熱唱中です。

みゆき「次はどうしましょうか…。」

信童「俺は『止マレ!』が歌いたい。」

こなた「じゃあ私たちがこれ歌ったあとでいい？」

信童「え、いいけど…。」

と、言つてたら秀吉さんが歌い終わりました。

秀吉「…歌い終わったのじゃ。点数は…。」

『87点!』

秀吉「まあまあつてとこかの。」

こなた「じゃあかがみん!つかさちゃん、みゆきちゃん、行くよー!」

かがみ「かがみんって呼ぶな!」

つかさ「は、恥ずかしいけど…。」

みゆき「4人で歌うんですか…。」

こなた「行くよー!曲は…。」

『もってけ!セーラーふく』

く
く
く

キンジ「す、すげえ…。」

アリア「みんな…すごいわ…。」

信童「（＾－＾）」

智「（。。。；）」

こなた「…歌い終わったよ。点数は…。」

『100点!』

こなた「マジ!? やったー!」

つかさ「わぁーい、100点が出たよー!」

かがみ「へ、へえ…。」

みゆき「よかったです。」

…で、その後もいろいろ歌いました。

充実した一日になりました。

余談ですが、愛ちゃんと羅井野ちゃんはずっとSMプレイしていました。

あの人たち気にならなかったのかな…？

ウィッチ「あの子…怖い顔でやっていたわね…。」

ドラコ「背筋が凍るかと思った…。」

「「SMプレイを…。」」

気になっていました。

カラオケ（後書き）

この小説を読んでくださってありがとうございます。

結構なグダグダですがそれでも見てくれてうれしいです。

羅井野「ほんとにね…うれしいことだわ。」

影久「頑張ろうね！」

河村「うん！」

所で信童が言ってたメカや天使の夢や蒼の旋律の元ネタってわかりますか？

分かる人は分かると思いますが…。

ちょっとヒントを…すべて同じゲームの曲です。

ナスと水色少年と黒サントと（前書き）

今回ぶよぶよのキャラが出ます。

紫のあいつや水色のあいつや…。

ともかく出ます！

ナスと水色少年と黒サントと

―万事屋―

銀時「え？人探し？」

ウィッチ「そうですね。あなたたちは何でもやってくれと聞いて頼みに来ましたの。」

新八「そうなんですか。それにしてもここら辺では見ない人ですね。」

神楽「お前ら一体どこから来たアルか？」

ウィッチ「えつと確か…ぷよ勝負していたら白い光に包まれて…」

ドラコ「気付いたら此処にいたんだよ。」

銀時「つまりは何か？異世界人ってことか？」

ウィッチ「そうなるのかしら？」

河村「この子のお友達も多分困ってるから探してあげてよ。」

銀時「そうゆうのお前らで探せばいいだろ。俺らは今は忙しい…。」

信童「これあるけど？」

銀時「よし、やってやろうじゃねえかあ！」

新八「変わり身早！」

「ふっふっふっ…話は聞いたわよ！」

銀時「だ、誰だ！？」

ハルヒ「その悩み…私たちが解決してあげるわ！」

銀時「何だよテメエら！！どこから入って来てんだよ！」

ハルヒ「人探しは私たちがしてあげるわ！」

銀時「うるせえ！俺たちの仕事だ！」

ハルヒ「いいえ、私たちよ！」

河村「あ、そのことなんだけど…。」

銀時・ハルヒ「え？」

ハルヒ「学校全体に伝わっていたのね…。」

河村「これだけいれば見つかると思うんだけど…。」

「ぎゃああああああ……！！！！！！！！」

ハルヒ「！この声は……。」

銀時「あの林の中からだ！」

ウィッチ「向かうわよ！」

――林の中――

漣「あ……あ……。」

ハルヒ「どうしたの一体！？」

律「ナスのお化けが出たんだ……！！」

銀時「は？何言ってるのお前ら？そんなもん出るわけ……。」

？「おたんこなあゝす！オレはナスじゃないんだなあゝす！」

声のした方を見ると……メガネをかけたナスがいました。

銀時「本当に出やがった……！！そして新八と同じ声のメガネナスだ！」

新八「黙れあんた……！！紫色になるまで痛めつけんぞ！」

ウィッチ「……あなたは……。」

銀時「え？」

律「知ってるの…？」

？「！その声は…ウィッチ！」

ウィッチ「ナスグレイブ！あなたも此処にいたのね！」

ナスグレイブ「久しぶりなんだなあゝす！」

？「おー、ウィッチだー。」

ドラコ「あ、シグ！」

シグ「会えたねー。」

ウィッチ「あなたたちも飛ばされてきたの！？」

ナスグレイブ「そうなんだなあす。ぷよ勝負していたら白い光が出てきて気付いたら知らない林にいたんだなあす。」

シグ「ずっと、虫探してた。」

ウィッチ「あ、あなたらしいわね…。」

ドラコ「ねえ、他のやつ知らない？」

ナスグレイブ「うゝん…他は見ていないんだなあす。」

シグ「知らない。」

―街―

ナギ「本当にいるのか？」

ヒナギク「しかし…手がかりがないのよね…分かりやすいって言うてたけど…そんな人いるわけ…。」

？「やあゝこ・ん・に・ち・はゝ。」

ハヤテ「えっ！？季節ハズレの黒いサンタさんですか！？」

ヒナギク「！あなた…危険なニオイがするわ…。誰！？」

？「え？危険なニオイ？嫌だなあ。甘い、スイートな香りだと思うんだけどなあ。」

ヒナギク「あなた…此処の人じゃないようね。」

？「え？わかりますか？実は僕、此処はじめてきた場所なんですよ。」

ヒナギク「ウィッチって子が人探しをしていて…あなた知ってる？」

？「ウィッチですか…あの子ですね！」

ヒナギク「（やっぱりこの人が…。）所で名前は？」

？「レムレスです。」

捜査報告 ナスグレイブ、シグ、レムレスを見つけました。

次回に続く。

ナスと水色少年と黒サントと（後書き）

スバル「狂撃隊の出番だ！」

それは、次回。

スバル「な、何だと!？」

他搜索（前書き）

ぷよぷよのキャラがたくさん出てきます。

他搜索

―街―

河村「あつ、ヒナギクちゃん。見つかった？」

ヒナギク「え、ええ…見つかったけど…。」

レムレス「やあ…こ・ん・に・ち・わ…!!」

河村「何！？ものすごく怪しいお兄さん!？」

ドラコ「あ、レムレス。」

ウィッチ「またそうしてお菓子配ってたの？」

レムレス「うん、そうなんだけど…なぜかみんなもらってくれなくてね。」

河村「当たり前だと思っけど…。」

ウィッチ「所で…あなた、他の人見かけませんでしたか？」

レムレス「そう言えば…此处に来る前に工場あたりで「ふいふしゅー!!」って声が聞こえたから…。」

ウィッチ「…あいつですわ…。」

ドラコ「あいつだね。」

河村「え？知り合い？」

ウィッチ「でもほつといても大丈夫だと思いますわ。」

ドラコ「そうだね。」

河村「本当に誰のこと？」

レムレス「とりあえず…探しに行こう。」

ヒナギク「それだったらこっちを通るといいかも、まだ探していないから他の人が見つかるかと思うし…。」

レムレス「そうだね。」

シグ「じゃ、行こー。」

――工場――

？「へいへい…どうしたんだいきなり気絶して？」

当麻「ん…あれ、俺は…ってうわぁ…!!」

？「そんなに俺のダンスがいけてるのかいベイビー？」

当麻「ってかお前誰だよ!!何で魚に手足が生えているのさ…!!」

？「俺様は魚じゃねえ！！すけとうだらさ！」

当麻「す、すけとうだら？」

すけとうだら「そう言っわけでもろしくな！ふい〜〜〜しゅ！！！」

当麻「（ウゼエ。。。）」

？「ぐつぐぐー！！！」

当麻「？何だ…この黄色い生き物？」

？「ぐぐぐぐー！！！！ぐつぐぐぐー！！！」

すけとうだら「おっ、カーバンクルじゃないか。どうしたんだそんなにあわてて…アルルはどうしたんだ？」

カーバンクル「ぐつぐ、ぐぐぐぐーぐぐぐぐぐー！！！」

当麻「とりあえず、案内してくれないか？」

カーバンクル「ぐぐー！！！」

―江戸ノ町―

？「はあゝ…ぼくは勉強がしたいんだけどなゝ何なんだよ此処は…。」

「

？「喋るのやめなさい…耳障りだワ…。」

？「そうよ。男なんだからそんな風にぐちぐち言つと一発かますわよ！」

？「それやめてよ〜！」

レムレス「あ、ラフィーナにフェーリにクルーク！」

クルーク「れ、レムレス〜！」

フェーリ「先輩…！」

レムレス「まさか君たちも飛ばされて此処へ？」

フェーリ「はい…。」

ラフィーナ「しかし、此処はどこなんですの？」

ヒナギク「まずはこっちに集まってくれないかしら？そっちで説明するから…。」

—学園—

ラフィーナ「ひ、広いわね…。」

シグ「あ、アルル。」

アルル「あ、シグ！それにみんな！！」

ラフィーナ「！怪我してるじゃない！一体どうしたのよ！」

アルル「あはは…ちょっと転んで…そこをその人に助けられて…。」

当麻「よっ！」

河村「あ、お…上条さん！」

当麻「今何か別の呼び方で呼ばれそうな気がしたが…久しぶりだな！」

河村「はい！」

シグ「あ、お魚。」

すけとうだら「ふい〜〜〜しゅ！お魚じゃねえって言うてるだろ！」

河村「うわあ！！」

ウィッチ「ちょっと！生臭いのよ！さっさと魚は海へ帰ってちょうだい！！」

すけとうだら「会った瞬間にそんなことを言うなんて酷すぎるぜ…。」

？「あ、ラフィーナ！」

？「あら、いつものやつらに会えたわね。」

？「あ、みなさん。」

やって来たのは頭に赤い帽子をかぶった女の子と青い髪をした女性と頭に二つの団子型にまとめた緑色の髪をした女の子がやって来た。

ラフィーナ「アミティさん！それにリデルさんも！」

シグ「あ、ルルーだ。」

アルル「みんな同じく白い光に包まれてきたんだって。」

リデル「皆さんと会えてほっとします。」

スバル「ヨーテメエら。」

河村「あ、スバルさん。」

スバル「なんか知らんやつがいたから連れて行くとしたんだが…お前ら誰か知ってるか？」

？「離せよ！お前一体誰なんだ！！」

ウィッチ「あ、シエゾ。」

シエゾ「その声は…ウィッチか？」

スバル「あ、知り合い？んじゃ置いていくわ。」

シェゾ「お、おい!!」

スバル「あとはよろしくなー。」

ビュン!

河村「飛んでっちゃった...。」

信童「スバルさん...またポケモンで...。」

シェゾ「こんなに飛ばされてきたやつがいるとは...。」

ルル「そうねえ...でも一人、いないわ。」

アルル「あ、サタンか。」

シェゾ「そう言えばあいつはどこにいるんだ?」

?「此処はどこかと思ったら離れ小島か...ま、アルルは来てくれるからな。」

その後、みんなこの街に住むことになりました。

で、何名かは学園で勉強することになりました。

― ？ ？ ？
-

？「…試しに送ってみるか…。」

宇宙に浮かぶ船艦。そこから河村がいる所に向かって一つのカプセ

ルが飛ばされた。

―屯所―

キラッ

涼平「流星…。」

ドゴオオン…!!…!!

？「…がぁぁ…。」

そのカプセルの中からどろどろの液体みたいな生命体が現れた…。

他搜索（後書き）

次回、とある事件が起こります。

（銀魂ネタが出ます。）

分からない物には無理に手を出すな（前書き）

前回の最後を見て、大体の人があっちのネタを思いつくでしょう。

けど、今回の話はあっちの話じゃなくてこっちの話ののです。

いや、普通分からないか。

分からない物には無理に手を出すな

その日の放課後、私は街に向かいました。

いつもと違うことと言えば、霧が立ち込めていました。

まさかこの時…あんな事件が起こっていたなんて…。

河村「…誰もいない…。」

信童「あ、河村。」

影久「亜由…。」

河村「あ、みんな。」

信童「何でみんないないんだ？」

河村「分からない…誰かいるとは思っただけ…。」

麻衣「あ、あれ人じゃない？」

麻衣が見つけたのは普通の人。

智「本当だ〜。」

その人に私は駆け寄りました。

河村「あの、すみません…何で…。」

人「うがぁあ〜…。」

河村「ひっ…！」

その人が振り返った瞬間、口からピンク色の液体がどろどろと垂れていた。

人「うがぁあ〜…！」

河村「ひっ…ひっ…。」

ガッ

河村は近くにあった標識をつかみ…。

ズボッ

人「…！？」

その標識を一気に引き抜き…。

河村「キャアア！！！！」

ドゴオオオン！！！！！！

人「ぎゃあああ！！！！！！！！」

前にいた人に思いっきり叩きつけた。

麻衣「○ユラ○ラのシ○ちゃんみたい。」

信童「哀れ…。」

智「そう言えば亜由ちゃんって手の握力が異常に強いんだっけ。」

信童「いや、殴る力も相当だからな。」

河村「はあ…はあ…怖かった〜！」

信童「俺としては別のことに恐怖を覚えたんだが。」

羅井野「でも、一体何が…。」

その時…。

ピーッ！ピーッ！

警報機が鳴りだしました。

『緊急警報発令！緊急警報発令！今、外出中の住民の皆さんは速やかに建物の中に避難してください！決して、口からピンク色の液体が垂れている人には近づかないでください！繰り返します…。』

―警察署前―

リポーター1「あれは一体何なんですか？」

リポーター2「住民の暴動は、一体何が原因なんですか？」

？「今、捜査中。」

リポーター3「噂によると、あれは寄生生物で、人から人へと寄生して行っている…。」

？「今、捜査中。」

リポーター4「街を完全封鎖すると聞きましたが？」

？「今、捜査中。」

リポーター1「それは完全に住民を見捨てたと取っついていいんですか？」

？「今、捜査中。」

リポーター5「現在〇よ〇よが20周年中なのですが、あのどろどろした液体の生物とは関係あるんですか？」

？「〇よにピンク色は無いつてば。」

人「うがぁゝ…体ゝ…。」

人「新しいゝ体ゝ…。」

私たちは急ぎよ、パチンコ屋の隣にあった脇道に逃げ込みました。

河村「こっちも完全にダメだよ…。」

信童「しょうがない、こっちに行くか。」

タッタッタツ…。

スチャ

信童「!!！」

信童の首に鋭い刃物が突き付けられた。突き付けたのは…。

桂「今すぐに手を上に上げて口の中をこっちに見せる！」

桂だ…。

河村「か、桂さん！」

桂「お、お前らか…。どうやらやつらにはやられていないようだな…。」

河村「か、桂さん…その血…。」

桂の頭から血が少し垂れていた。

桂「あ、ああこれか…俺も油断してたようだ…こんなことになるなんてな…。」

桂の回想を見ると、ゴミ袋を持った桂が階段から転げ落ちている絵だった。

麻衣「あの、桂さん？これ違うことで怪我しているんですが？」

桂「くっ…サンダルを履いていなければ…。」

智「くっ、ってかっこつける所じゃないよ。」

桂「ごみ袋の異臭がきつかったのな。くっ…。」

麻衣「くっじゃねえんだよテメエ、関係ねえ所で怪我しているんじゃないよ！」

羅井野「ヅラさん、そろそろあなたの頭も捨て時ですよ。所でヅラさん、あいつらは一体何なんですか？」

桂「ヅラじゃない桂だ。うむ…口から垂れているのは何やら寄生生物らしい…寄生された人は自我を失い寄生されていない体を求め、暴動を起こすその姿まさに西洋のゾンビ…あのどろどろしたやつはヘドロに似ている…ヘドロゾンビ…ヘドゾンでどうだ？」

羅井野「黙りなさいカス。」

桂「カスじゃないヘドゾンだ。」

ヘドゾン「体…。」

羅井野「不味いわ！ヘドゾンに見つか…。」

桂「…コホン。」

ドガア！！

羅井野ちゃんは思いきり桂さんの顔にけりをくらわせました。

羅井野「嬉しそうにするんじゃないわよ！腹立つのよ！！！」

桂「はーはっはっ！！お前今ヘドゾンって言ったな！！オレはちゃんとこの耳で聞いたからな！！ヘドゾンけてーい！！！」

羅井野「冗談じゃないわよ！！誰がそんなこと…。」

河村「そんなこと言っている場合じゃないよ！囲まれてしまったよ

「!!」

もうだめかと思った…その時…。

ガラッ

?「こつちだ!!」

建物の窓が開き、中から人の声がした。私たちは無我夢中でその窓に飛び込み、間一髪助かった。

羅井野「あなたこの波に落ちなさいよ…!」

桂「お前がみんなの犠牲になれば…。」

麻衣「いい加減にしろあんたら!!」

河村「有難うございます!えつとお名前は…。」

?「長谷川だ。此処は俺がバイトを務めていた場所だな。此処に逃げ込んで助かったってわけだ。」

ぽたっ…ぽたっ…。

河村「!!」

音がした方を見ると長谷川さんの方から血が、垂れていた。

河村「は、長谷川さん…まさか…。」

長谷川「早くお前らあっちの方に避難しな。俺も焼きが回ったもんだ…。まさかやつらにやられるなんてな…」

で、回想を見ると変な人たち数人に囲まれていてその変な人たちのボスと思われる人に銃を突き付けられている長谷川さんの姿があった。

河村「何これ！？一体だれ！？これ別の事件に巻き込まれているよね！？」

長谷川「店長だ。遅刻したら叱られた。」

河村「一体どんな店長さん！？どんだけ無駄な存在感あるの店長さん！？」

麻衣「ってかあんたらヘドゾン関係ない所でやられているだけじゃんかよ！！」

桂「（いやヘドゾンって…。）…コホン。」

ズガッ！！！

羅井野「嬉しそうにすんなー！！！！！」

長谷川「この先のパチンコがたくさん置かれている所に俺たちみたいに寄生されていない奴らが多数いる。そっちの方に行こう。」

河村「は、はい！」

河村「こっちですね… あっ、みんな！」

避難している場所にはクラスのヒナギクさんと真君がいた。

ヒナギク「河村ちゃん！」

丹羽「みんな無事か！？」

河村「あ、はい…。」

？「イトコの友達みんな無事だ」。

喋りかけて来たのは髪が透き通るような水色をした美少女だった。

河村「…？誰？」

？「藤和エリオ。」

河村「そうなんだ、よろしく！」

エリオ「よろしく。」

レムレス「君たちも無事だったんだ。」

河村「レムレスさん、それにアルルちゃんやシェゾさん、ルルーさんも！」

シェゾ「全く…変な所に飛ばされて来たと思ったたらこんなことになるなんてな…。」

アルル「一体なんだろうあれ…気持ち悪いよ…。」

ルルー「それにしても…なんだかこの店に集まってきたくないかしら？」

？「知りたいか？」

河村「あ、スバルさん。」

アルル「あれについて知っているの？」

スバル「ああ。ちょっと狂撃隊の中でああゆう物に詳しい奴がいてな。あのピンク色の物体は宇宙生物だ。」

ルルー「宇宙生物…ってことは地球外生命体？」

スバル「正式名称は『寄生型生命体 X2-581』。ああやって他の生物の体に寄生し、その寄生した生物の体の中で繁殖し、繁殖した仲間を寄生していない生物に寄生させて、どんどん繁殖していく宇宙生物だ。寄生された生物はX2-581によって脳細胞も浸食されて、自我を失う。」

アルル「そんなに恐ろしい物が…。」

スバル「他の星ではその星上にいるすべての生物がX2 - 581に寄生されたって言う所もある。」

シェゾ「何でやつらは此処に集まっているんだ？奥の见えていない奴らも集まってきたっているようだし…。」

スバル「X2 - 581は寄生していない生物を臭いでかき分けているんだ。だからこうやって集まってきたいる。俺らの臭いで此処を嗅ぎつけているんだろう。この霧もやつらのせいだな。」

アルル「えーっ！？最終的にはボク達も危ないってこと！？」

スバル「そうゆうことになるな。」

ルル「あれを倒す方法は無いのかしら？」

スバル「ひとつだけある。」

河村「その方法って…？」

スバル「今、体を寄生している奴らはすべて幼体だ。幼体を生み続ける母体を倒せば幼体すべてを壊滅させることができる。」

河村「そうなると母体はどこにいるの！？」

スバル「それはまだ…。」

シェゾ「ってか何で母体は寄生しないんだ？同じ寄生型生命体なんだろう？」

スバル「そのこと何だが…母体は幼体と比べて体があまりにも大きすぎて生物に寄生できないらしい。だから寄生のことは幼体に任せられている。母体は幼体を自由自在に操れるって聞いたからな。」

シエゾ「そうか…その母体を倒せばやつらを壊滅できるのか?」「」

スバル「ああ、すべてだ。一つの星に母体は一匹しかいられないからその母体を倒せばその星の幼体はすべて壊滅する。」

銀時「なるほど…厄介なことをしてくれるじゃねえか。」

河村「あ、銀時さん!」

桂「銀時!!」

銀時「何だ、ツラもいたのか。」

桂「ツラじゃない桂だ。」

河村「此处でケンカはやめませんか?」

銀時「ケンカはしていないぜ?」

桂「これほんの挨拶だ。こいつがいれば多分その母体も倒せるだろう。所で銀時よ、あと二人はどうした?」

銀時「ああ、あいつらか。今裏口で寄生したやつが入ってこないか見張っている。」

桂「そうか…。」

スバル「やつらは口とか鼻の穴とかそうゆう所から寄生してくる。だからこれを使え。」

手渡されたのは…。

河村「ガスマスク？」

スバル「そうだ。これで少しは寄生される可能性は低くなる。」

銀時「でもどうするんだ？さっきの話だと場所が分かっていないそうじゃねえか。」

スバル「今俺ん所の初音と雷文寺が協力して捜している。あと空からはアリシヤアも探している。」

河村「え…？」

スバル「お、お前らはあったことが無かったな。」

椎名「副隊長！場所が判明しました！」

涼萌「場所が…ってあー！お前あの時の銀髪天パー！」

銀時「テメエら確かあの時の…。」

スバル「あれ？知り合い？」

椎名「ってそんなことは…分かりましたよ！母体の場所が…。」

スバル「一体どこだ!？」

椎名「このすぐ近くです!エレベーターから屋上に行けば確認できます!」

スバル「そうか…よし、すぐに行くぞ!」

ドガアアアン!!!!!!

ヘドゾン「うがぁぁ…。」

スバル「不味い!此処を破られた!」

長谷川「こつちだ!」

銀時「新八!神楽!」

神楽「銀ちゃん!どうしたアルか?」

銀時「扉が破られたんだ!早くしないとあいつらの餌食になるぞ!」

新八「は、はい!」

ダダダダダダダ…。

河村「うわああ!!」

アルル「追いかけてきている!!」

椎名「エレベーターが来た!」

涼萌「早く!!」

エリオ「そおーれ!!」

長谷川「あ、ちょっと…うぎゃあああああああ…。」

―エレベーター内―

銀時「はあ…はあ…全員無事か?」

シエゾ「えっと…ん?あれ一人いないんじゃないか?」

銀時「ちょっと待てよ…いや、全員いるじゃないか。」

レムレス「え、本当に?よく数えてみなよ。」

銀時「大丈夫だって。」

銀時 新八 神楽 ツラ 長谷川さん（のサングラスとガスマスク）
河村 影久 信童 麻衣 智 羅井野 ヒナギク 真 エリオ
アルル シェゾ ルルー レムレス スバル 椎名 涼萌

銀時「ほら、全員だ。」

シェゾ「待たんかい！！！！」

丹羽「は、長谷川さんが…グラスンだけしかー！！！！」

銀時「そつだよ。長谷川さんだよ。」

丹羽「そつじゃなくて長谷川さんのグラスンしかねえんだよ！！」

ガッ！

銀時「うお！」

丹羽君は手に持っていたサングラスを思いっきり銀時さんに投げつけました。

新八「不味いよ！一階に置いてきちゃったんだ！！助けに行かないと！！！」

神楽「嫌よ、今行ったらあいづらみたいに体ん中がどろどろだらけになるネ。」

新八「お前に人間の心は無いのか！―僕たち長谷川さんのおかげで助かったんですよ！？」

銀時「いや、よく考えてみる。これ…長谷川さんじゃね？」

シエゾ「どつからどう見ても汚ねえグラスンだろが！―」

銀時「いやいや人の心を持ってみろつて。このグラスンと一階のあれ…どつちが長谷川さん？」

アルル「お前が人の心を持ってよ！―」

神楽「一階のあれただのグラスン掛け機アルよ。」

レムレス「グラスン掛け機つて何だよ！―」

神楽「グラスンを掛ける棒的な物アルよ。」

ルル「そんなもんそこらあたりのフックでいいでしょ！―」

神楽「そんなこと言ってるけど本体はこっちだもんね。ねーマダオ。」

銀時「うん、銀さん。」

新八「黙ってるお前ら！―」

桂「お前たちよく考えてみる！人の心は一体どこにあると思うんだ！？胸？いや違う！頭？いや違う！そう…それはメガネにあるのだ！！！！」

新八「黙ってるッラ！！！」

桂「ッラでは無い桂だ！！！」

新八「僕が助けに行きます！だから一階で…。」

チーン

何故か、エレベーターが三階で止まった。

新八「え？ちよっと、僕は一階で下してって言ったんです！！」

アルル「誰も触ってないよ！！」

銀時「あれだろ？三階で乗るやつがいるんだろ？」

全員「え……………？」

銀時「開くな！！！！この扉を死守しろ！！！！」

ガーッ

全員「ひゅっ！！！」

？「…。」

全員「…。」

エレベーターの前にいたのはヘドゾンじゃなくて白い大きなペンギンみたいな何かだった。

銀時「テメエかよ！！驚かせんな！！！」

桂「おおー！エリザベス！！無事だったか！ん？その下にいるのは…。」

河村「長谷川さん！？」

桂「まさかお前…長谷川さんを助けて…。」

銀時「何だよこいつ、何で無駄に男前なんだよ！！！」

シエゾ「全く長谷川さん…あの中をよく生きてこられたな。」

新八「そうか、エリザベスにはやつらの攻撃が聞かないんだ！！！」

桂「なるほど、エリザベスには寄生する場所がない！俺たちは無敵艦を手に入れたようなものだ！エリザベス、これからは先陣を任せろぞ！！！」

エリザベス『足手まといにならないでよね。桂さん。』

[illegible]

河村「あ、あの……銀さん？」

銀時「言うな。やつの死は絶対に無駄にするな、絶対に……」

河村「いや…そうじゃなくて…長谷川さん…エリザベスさんに連れてこられたってことは…」

長谷川「うがぁ……」

シェゾ「ゲー！ やっぱり寄生されてるよ！！！」

スバル「おい皆！そいつは塩をかければ少し、動きを止められる！」

銀時「おい、ナメクジみたいなこと……」

長谷川「うがぁー!!」

銀時「くっ！おりゃああー!!」

長谷川「ぐああああー!!!!!!」

銀時「よし、動きを止めた!!」

長谷川「うがぁー!!」

シエゾ「でも動き出したぞ!!」

河村「ひっ…ひっ…キャアアアアー!!!!!!!!」

ドカアアアン!!!!

長谷川「ぎゃあああああああー!!!!!!!!!!!!!!」

銀時「ってか何その標識!!いつから持っていたんだよ!!」

スバル「でも…助かった…。」

ピンポーン!

スバル「着いたぞ!!」

ダダダダダダ…。

スバル「急げ!この先に屋上につながる扉があったはずだ!そこに行けば…。」

椎名「ここだ！皆早く！」

ダダダダダダ…。

ガシャン！

銀時「ふーっ…なんとか扉で防げたな…。」

スバル「…！」

ヒナギク「あれが…。」

椎名「母体…。」

目の前には…自分たちの何十倍、いや何百倍も有りそうなピンク色の塊がいた…。

分からない物には無理に手を出すな（後書き）

次回、母体と対戦…。

どんな事も諦めずに希望を持って（前書き）

母体と対戦！

そして最後に…。

どんな事も諦めずに希望を持って

リポーター「えー私は封鎖された街の入り口に來ています。入ってきた情報によるとこの街の住民は全員寄生されたことです。また新たな情報が入り次第…。」

管理局員「えー私たちは街の近くにある森で発見されたカプセルからあの寄生生物と同じDNA反応を確認いたしました。なのであの寄生生物はこのカプセルによって運ばれてきたと考えられます。そして、近くにはこんな紙が…。」

その紙には「○よ最高！」と書かれた紙が…。

？「何だとふざけやがって祝うならちゃんと祝えっつんだ！こんな中途半端に祝ったら相手の方に不快感を与えるじゃねえか、あと先考えろっつてばあ…！」

管理局員「つーか松平さん、あなた警察の者でしょ？この事件は私たち管理局員に任せて下さいって言ってるでしょ？つてかそんな恰好じゃ攻められたときに寄生防げないんですけど！？風邪じゃないんですけど！？」

松平「バカ野郎テメエら…！！寄生生物なめんじゃねえぞ…！！！」

管理局員「す、すいません…！！！！！！！」

松平「いいかテメエら…！！家に帰ったらうがい手洗い忘れんなつてばあ…！！！！！」

管理局員「寄生物なめんじゃねえ！！！！！！」

河村「こ、こんなに大きいんですか…？」

スバル「いや、此処まで大きいとは聞いていなかったな。」

麻衣「快援隊の船よりも大きい…。」

銀時「（何でこいつ辰馬の事知ってんだ…？）」

シエゾ「あいつを倒す方法は無いのか？」

スバル「確かどこかにコアがあったと思うが…。」

新八「でも早くしないとさっきのゾンビがやってきますよ！？」

スバル「そうなる前にあいつをやっつけないとな…。」

母体「！ぐおおおおおお！！！！！！！！」

スバル「あれ？気付かれた？」

神楽「！！」

神楽は地面の方を見る。

神楽「銀ちゃんやばいネ！ゾンビがどんどんこの建物の中に入ってきてるネー！！」

銀時「何だと！？」

スバル「早くしねえと…ってなんか触手でなんかしようとしてきてねえか？」

麻衣「！！ま、まさかこの出来事はしょ「はいはいそのこと喋ったら15禁になりますからねー」。」ううゝ…。」

麻衣が何かをいようとしたが羅井野によって止められてしまった。

スバル「なんかあの触手がでかく見える…。」

新八「ってかあれで潰そうとしてきてますよ！？早く逃げないと！！」

母体は触手で河村達を潰そうとしてきた。

スバル「さっきのドアはゾンビでいっぱいだし…かといってあれ以外逃げ場ないし…。」

涼萌「いろんな所行きたかった…。」

神楽「酢昆布いっぱい食べたかったアルね…。」

智「いっぱいいろんなアニメ見たかった…。」

信童「今度の番組見たかった…。」

新八「何で諦めモード何ですか！？もうちょつと生きる希望持ちましょーよ！ねえスバルさん！！！」

スバル「ハルヒとか言う奴に会いたかった…。」

新八「何であなたも諦めているんですかあああああああ……！！！！」

シェゾ「不味いぞ！潰される！！！！！」

だが、そう言っているうちに触手がどんどん迫ってきている…。

アルル「…あれ？なんともない…。」

スバル「！触手が石になっているぞ！！」

見ると先ほどの触手が固く、石みたいに固まっていた。

？「大丈夫ですかみなさん！」

すると空から背中に黒い翼の生えた少女がこちらに向かって飛んできていた。

椎名「アリシヤアさん！」

スバル「全員無事だ。」

アリシヤア「良かったです！」

スバル「所で…あいつを倒そうと思うんだが…。コアがあると思うんだが…。」

アリシヤア「！」

椎名「心当たりがあるの！？」

アリシヤア「多分目を攻撃したら少しひるんだので多分そこかと…。」

レムレス「目…でもあそこまで行くには飛ぶしかないですね？」

涼萌「しかも此処の位置を確認できるほど目がいいからあそこまで行くにはかなり困難だと…。」

アリシヤア「いや、大丈夫だと思う。」

スバル「何でだ？」

アリシャア「あいつは素早い動きには対応できない。と言うかあいつはパワーに頼るやつだ。早めに対応できればあいつの攻撃はまず当たらない。」

スバル「なるほど。」

アリシャア「じゃあ私は先に行つてきます！」

そう言うときアリシャアは母体に向かって飛んで行った。

スバル「俺たちも行くぞ！」

レムレス「ちよつと待って！どうやってあそこまで行くんだい？」

スバル「そうだな…よし、エアームド、ドンカラス、ムクホーク、ボーマンダ、アーケオス、力を貸してくれ！」

ポン！ポン！ポン！ポン！ポン！

丹羽「ぽ、ポケモン！？」

河村「持ってたんですか！？」

スバル「持っていたぞ、さあ早く乗ってくれ！俺はピジョットで行く！」

ポン！

スバル「行ってくる！」

スバルはピジョットに乗って向かって行った。

シエゾ「俺たちも行くぞ！」

レムレス「ああ！」

そう言つて全員乗ったあと母体に向かって飛んで行った。

バカアアアン！！！！

すると、先ほどいた建物のドアからヘドゾンが大量に出て来た。

信童「あつぶねええええ！！！！！」

レムレス「もうちょっと遅かったら僕らもやられてた、ね。」

シエゾ「早く行くぞ！！！！！」

スバル「おりゃあああ！！！！！」

ドドドドドドド！！！！！！

母体「ぐおわあああ！！！！！！！」

河村「スバルさん！」

スバル「お前らも来たか！」

アリシャア「やっぱり目が弱点のようですね…。」

ヒナギク「ってか私たち何もできないでしょ？どうしたらいいの？」

スバル「このバズーカを使ってくれ！」

ヒナギク「わっ…！」

レムレス「僕たちは魔法使えるから…いいよね？」

スバル「そうだな、よし、行ってくれ！」

母体「ぐおおおお…！！！」

びい　い　い　い　い　！！！！

スバル「うおおお…！！ビームも出すのかよ！」

アルル「そうとなったら張り切るよー！」

スバル「あいつのビームには気をつけろ！」

アルル「わかってる！アイスストーム…！」

シエゾ「アレイアード…！」

レムレス「トレノワール…！」

どどどどどどどど…！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

母体「ぐおおおおお!!!!!!!!」

スバル「おりゃあああああ！！！！！！！！！！」

椎名「雷い！い！い！い！い！！！！！」

涼萌「そいや〜!!」

アリシャア「死ねえええええ！！！！！」

ቅዱሳን ዮሐንስ ስለገሰጠው ጥቅምት 19፡1፡

母体「ぐおおああああ……！！！！！！！！」

エリオ「えい！」

丹羽「うおりゃああ!!!」

ヒナギク「それええ!!!」

銀時「馬鹿もおおおん!!!!!!」

新八「ダメガネでもできることがあるんだああああああ！！！！！！！！」

神楽「うおりゃあああああ……！！！！！！」

影久「うっしゃあああ！！！！！！」

[illegible]

麻衣「ストロング砲！！！！！！」

智「ええええええええい！！！！！！」

羅井野「あなたの苦しみの声を聞かせなさああああい！！！！！！」

どどどどどどどどどど！！！！！！

母体「ぐおわああああああ！！！！！！」

スバル「よし、後一発だ！」

アリシヤア「行け！河村！お前だけだ！！」

河村「うん、わかった！」

スバル「その持ち手を引け！エネルギーがためられてより強い攻撃ができる！」

河村「こう…だね。」

河村の持っているバズーカにエネルギーがたまっていく。

全員「行けええええええええ！！！！！！！！！！」

河村「はあああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」

どがあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！

!!!!!!!!!!!!!!

母体「ぐおおおおおおお……。」「

レムレス「…あんなにでかかった母体が消えた…。」

スバル「倒したんだ…。」

河村「やったああああ！！！！！！」

住民1「…あれ？何してたんだ？」

住民2「なんだかいろんな人を襲っていたような…。」

レムレス「皆元に戻ったし、まずは一件落着つてとこかな？」

スバル「そうだな…この後なんか食べに行くか？」

銀時「とりあえずぐちゃぐちゃしたやつはもう見たくないぜ。」

新八「それもそうですね。」

全員「あはははは……!」

—森—

その森にはあの母体があった。母体は完全に力を失っており、小さくなっていた。

母体「ぐおおお……。」

母体は、街から逃げ出し、とある場所に向かって行っていた。

母体「ぐおお…。」

そこは、管理局員がカプセルを発見した場所だった。

そこには二人の男女がいた。

一人は右手に大きな剣を持っている男性でもう一人はゴスロリ衣装を着ていて周りに複数の人形が浮遊している少女だった。

母体「！ぐおお！！」

？「お前…俺たちがなんて言ったかわかってるよなあ？」

？「この街のやつら全員を操っておたがいに殺しあわせる、って言う条件だったよねー？」

母体「…ぐお？」

？「何が言いたい…見たいなこといつてんな…教えてやろうか？」

母体「ぐお！」

すると男性は手に持っていた剣を上には振りかざし、こう言った。

？「達成できなかったものは…死。」

ずしゃああああ！！！！

一瞬にして母体は真っ二つに割れ、完全に死んでしまい、チリとなった。

？「しかし厄介なやつらがいるもんだなあ。」

？「そうよねー。あの狂撃隊と言うやつら、全員が危険…あとあの茶髪の子ー。」

？「ああ、河村ってやつか？あいつは普通のやつだから警戒する必要はないんじゃないのか？」

？「そうよねー。でもあの子宇宙の力を感じるー。」

？「宇宙の力？…まさか…。」

？「完全とは言い切れないけどもしそうだとしたらあの子、一番危険ー。」

？「そうか…よし、この事をボスに報告だ。帰るぞフラン。」

フラン「わかったわローレン、ジルコやクロム、テクネにも伝えましょー。」

そう言うと、二人の姿は一瞬にして消え去った。

オリキャラ紹介

アリシャア・K・K・フロールスキー

年齢：詳しいことは不明だが1000歳以上

誕生日：不明

性別：女

髪：金髪のツインテール

目：赤色

性格：真面目で結構努力家

狂撃隊所属の吸血鬼。見た目は中々高校生ぐらいだが年齢はかなり上。スバル副隊長がいると敬語だが実際はかなりの毒舌家で結構な世間知らず。魔法も使え、背中に黒い翼があり、空も飛べる。普通の吸血鬼が苦手とする日光やにんにく、十字架は平気。

どんな事も諦めずに希望を持って（後書き）

最後に出て来た二人の人物は一体…。

後ろから声をかけられるとちょっと吃驚するゝ人造人間編ゝ（前書き）

魔香「私の章ですか…。」

うん。

今回の長編はOP『ジレンマ』で、EDは『桜音』でよろしく願います。

美琴「ってかいつ以来の更新だああああ…!!!!!!」

バリバリバリバリバリ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ぎゃあああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

後ろから声をかけられるとちょっと吃驚するゝ人造人間編ゝ

―どこかの帰り道―

河村「あー遅くなっちゃったゝ…。」

河村は今、夜遅くの帰り道にいる。理由は街まで買い物に行ったら途中で迷ってしまったからだ。

河村「大丈夫かな…。」

…。

河村「!？」

河村は後ろを振り向く。だがそこには誰もいなかった。

河村「…気のせいかな…誰か後ろにいたような…って早く帰らなきゃ!」

？「…。」

近くの建物の上に河村の姿を見ている人影があつた…。

河村「ふ…帰ってこれた。」

影久「あー亜由ー。何してたのー？」

河村「あー愛ちゃん。ちょっと帰りが遅くなつて。」

影久「それで、途中大丈夫だった？」

河村「うん、誰もいなかったよ。でも…。」

影久「でも？」

河村「誰かいたような気はするんだけど…後ろ確認したら誰もいなかった…。」

影久「それ危ないよ、ストーカーかもしれないよ。」

河村「す、ストーカー？」

影久「うん、今すぐ部屋に入った方がいいよ。」

河村「うん、わかった。」

スバル「あー… かつたりー…。」

スバルたちは、いろいろな仕事を終え、帰ろうとしていた。

魔香「今日も夜遅くなりましたね。」

スバル「本当だぜ… 疲れたー…。」

？「待って下さい。」

スバル「？誰だ？」

後ろを見ると髪の長い少女がいた…。

スバル「おいおいこんな時間に子供ですか？子供は早く帰ってお父さんやお母さんに迷惑かけないようにしろよ。手料理作って家で待つてんぞ。」

？「そうですか… わかりました。」

スバル「そうそう。」

魔香「…。」

隣を見ると、三日月が酷く、怯えていた。

スバル「？どした？」

魔香「…早く逃げましょう！」

スバル「！？え、ちょ、おい！」

三日月がスバルの手を掴んで走り出した瞬間…。

ドガアアアアアン！！！！！！！！

スバル「！？」

先ほどいた場所に、大きな煙が立ち込めた。

？「人造人間13号体を回収して帰らせてもらいます。」

スバル「は？13号体？」

先ほどの少女がその場所から消えたかと思うと、スバルたちの真上に現れた。

スバル「何だこれ…瞬間移動か！？」

ドガアアアアアン！！！！！！！！

？「…逃げられましたか…まあいいでしょう。次こそは…。」

―次の日 学校―

信童「何？ストーカー？」

河村「うん、なんか昨日、つけられていたような気がして…。」

信童「たまたま帰り道が一緒だったやつじゃないのか？あそこらへん一本道だし…。」

河村「だとしたら何でいなかったの？」

信童「！それはだなあ…わかんねえ…。」

河村「もう…適当なこと言わないでよ！」

信童「ヘイヘイ…。」

涼平「あーお前ら…ちょっと来い。」

河村「？はい…。」

河村「昨日そんなことが…。」

涼平「ああ、そいつは人造人間13号体を回収するとか言っていたけど…誰の事だか…。」

信童「…それ…確かあの小さな女の子じゃあ…。」

涼平「三日月の事か？まあそりゃあり得るな…。」

河村「しかし、一体だれが…。」

信童「誰かに恨まれるような事したんじゃないんですか？」

涼平「いや、してないと思うが…。」

信童「そうですか…。」

涼平「不良のアジトを俺たちが突きとめて壊して警察に不良を突き出したり、悪い不正を行っている会社に乗り込んでその社員を殴り倒したり、何かを取り引きするやつらを倒したり、馬鹿な餓鬼を重度のお仕置きで反省させたり、ストーカーを監禁させたりしたが、何も思い浮かばない…。」

信童「うん、恨まれるような事いっぱいしていますね。最後犯罪ですから気をつけましょう。」

河村「そのうち社会からいなくなりますよ。」

涼平「おいおい酷いこと言うなあ…。」

信童「酷くありませんから。」

スバル「しかし昨日のやつらは一体…。」

魔香「…。」

スバル「？知っているのか？」

魔香「…いえ…。」

スバル「そうか…。」

？「嘘は言つてはいけませんよ13号。」

魔香「！」

スバル「その声…昨日のやつか…誰だ！？」

？「ご安心ください。13号を連れ戻しに来ただけですから…。」

スバル「13号？誰の事だ…。」

？「あなたの隣にいるのが13号です。」

スバル「隣…三日月の事か？」

？「三日月…？そんな名前があるんですか？13号になんて事をしてくれるんですか？」

スバル「お前さあ…一体何しに来たの？誰の命令で来てんのさ？」

？「知りたいですか？私たちを造ってくれたアペア様のご命令で来ております。」

スバル「アペア…？造った…？まさか！」

？「そうです、私たちや13号を造ったのがアペア様でございます。」

スバル「その人の命令ってなら聞かせてもらうことがあるな…。」

？「何でしょうか？」

スバル「なぜ今さら連れ戻しに来た？俺が工場内で不良品だから見捨てたと落ちていた紙に書いてあったが？」

？「ええ、普通なら見捨てています。ですけどですね…。」

スバル「何だ？」

？「私たちの機密情報が記憶されたはずの26号にその記憶がございませんでした。調べてみると見捨てた13号の記憶の中にインプットされていました。」

スバル「そうか…知られたくない情報が知られるのを恐れて連れ戻しに来たのか…。」

？「そうです。そして、26号はアペア様に不良品とされて、その後、処分されました。」

スバル「！」

？「そりゃそうでしょう？必要な事を覚えていない不良品などいる

はずもございませんから…。」

スバル「そのアペアってやつ…気に食わんな…いっちょ殺させる。」

？「それはできません。アペア様を傷つけるものなら私たちが許しません。」

スバル「そうか…ならお前から殺させる！」

スバルは、思い切って前にいる少女に襲いかかるが…。

？「ふん。」

ドゴォー！！

スバル「んな…！」

ドガアアアアアン！！！！！！！！

少女は、スバルの腹に向かってパンチを一発入れた。そして、スバルは壁に向かって飛ばされた。

スバル「んな…何て力だ…。」

？「さあ帰りましょう13号。アペア様のもとに戻るのです。」

魔香「嫌…嫌…帰りたくない…。」

？「何故です？アペア様が待っておられるのですよ？」

魔香「私はスバルさんと一緒にいたい！あんなクズの所になんか帰りたくない！」

？「そうですか…なら力ずくでも…！」

魔香「！」

少女の手が三日月に伸びる…。

ブシャアアアアアア！！！！！！！！

？「！？」

すると、少女の手に木刀が刺さった。

？「誰ですか…こんなことをするのは…！！！」

銀時「俺だが？」

銀時だ…。

？「何故私の邪魔を…！」

銀時「さっき覗く程度に見たが何やら危ねえ事になっていたんだ…。」

？「くっ…！」

そして、少女は木刀を抜く。

？「覚えていなさい…！今度私たちの邪魔をするようなら次はあり
ませんよ…！」

銀時「逃げたか…。」

スバル「ぐっ…。」

魔香「スバルさん！」

スバル「大丈夫…少し骨を折っただけだ…。」

銀時「そのどこが大丈夫だ？とてつもなく危険だぞ？」

スバル「しかし…俺も鈍ったもんだな…あんな小娘にやられるとは
…。」

銀時「さっきのやつは…？」

スバル「知らない…何やら三日月を連れ戻そうとしていたが…。」

銀時「三日月…こいつの事か？」

スバル「あいつは…どうやらじんガハツ…！」

魔香「スバルさん！それ以上喋らないでください！傷が酷くなりま
す！」

銀時「俺の所に来い。傷の手当てをしてやる。」

新八「で、何で僕の所なんですかーーーー！！！！？？？」

銀時「しょうがないだろ。俺ん所救急箱無いからな。」

魔香「何で無いの？何で無いの？傷負った時どうすんの！？」

銀時「自然治癒。」

魔香「時間かかるでしょ！！」

スバル「済まないな……。」

銀時「良いつてことよ。」

スバル「いや、俺はお前にじゃなくて……治療してくれているこの人に行っているのだが……。」

妙「あらあら、お礼はいいですよ。それと銀さん、またそれ食べているんですか？そのうち体こじらせて死んでしまいますよ？」

スバル「どんな物食っているんだよ……。」

銀時「そんなこと言うなって。人間誰でもいろいろこじらせているんだから。此处とか此处とか此处とか…。」

魔香「今いけない所指したよね？塵にしますよ？粉にしますよ？」

銀時「何気に恐ろしいこと言うな。」

スバル「当たり前だ。」

銀時「（しっかし…やつらは一体…。）」

？「すいません…13号の回収に失敗しました…。」

？「お前が失敗するとは珍しいな。一体何があつたのだ？」

？「13号の周りに、厄介なやつらがいます…。」

？「なるほど…そうか、ならそいつらの情報を2号、3号、4号、5号、6号に集めてもらえ。そいつらを消し去ってから回収を行う。そして7号、8号を研究所に配置しろ。」

？「わかりました…。」

？「ふふふ…覚悟しろよ…。」

後ろから声をかけられるとちょっと吃驚するゝ人造人間編ゝ（後書き）

魔香「何やら危ないにおいが！」

銀時「で、元ネタは何だ？」

やだなあゝ銀さんなら分かってるでしょ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2756w/>

私たちの学園生活日常

2011年12月2日18時45分発行